

石川県埋蔵文化財情報

第 14 号

巻頭図版（飯川谷製鉄遺跡、飯田町遺跡、加茂遺跡）

平成16年度県内発掘調査をふりかえって 所長 谷内尾晋司..(1)

発掘調査略報

飯田町遺跡(5)

飯川谷製鉄遺跡(7)

代田遺跡(9)

東三階 A 遺跡(10)

小島西遺跡(12)

栄町遺跡他 2 遺跡(14)

的場農業倉庫前遺跡(16)

太田 A 遺跡他(18)

正友じんとくじま遺跡(20)

森ガッコウ遺跡(22)

加茂遺跡(24)

和田山堡跡(30)

金沢城跡(31)

白江梯川遺跡(33)

平成16（2004）年度下半期の遺物整理作業 企画部整理課..(35)

資料紹介

白江梯川遺跡の木製高杯について 資料提示と問題点提起 久田正弘・石川ゆずは..(39)

調査研究

石盤考 松尾 実..(47)

2005年 8 月

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

飯川谷製鉄遺跡

写真1 遺跡遠景

遺跡上空から西の日本海に向けて撮影したものである。

写真2 地下式炭窯

奥へ1度改築されている。壁面下端沿いに排水溝が巡り、石・鉄滓で塞がれていた。



写真1 遺跡遠景



写真2 地下式炭窯

飯田町遺跡

写真1 飯田町の町並みと調査区（北から）

飯田町遺跡は、主に中世から近世にかけての集落跡である。調査で確認できた建物跡、杭列、区画溝の軸や近世の絵図面等から、現在の町並みの基本となるような形態が、すでにこの時期に形づくられてきたことが推測された。

写真2 掘立柱建物跡・杭列・区画溝群（西から）

掘立柱建物跡1棟を確認しており、隣接する杭列や東西方向にはしる区画溝群と併せ、中世から近世にかかる時期に建てられたものと思われる。また、近くには井戸跡も確認でき、今後出土品を整理するとともに、この地域に住んだ人々の生活の様相を復元していきたい。



写真1 飯田町の町並みと調査区（北から）



写真2 掘立柱建物跡・杭列・区画溝群（西から）

加茂遺跡

写真 1 H区第6面流路

縄文時代中期後半～後期中葉にかけての流路であり、手前側に木組遺構を検出した。細い杭などを円形に打ち込んだ遺構を3基、流路中央から奥側で検出した。

写真 2 L区第2面小区画水田

弥生時代後期～古墳時代前期頃の小区画水田であり、水口が2つ確認された。



写真1 H区第6面流路



写真2 L区第2面小区画水田

平成16年度県内発掘調査をふりかえって

所長 谷内尾 晋司

平成16年度は、県内全体で73件、約134,500㎡の調査(県31件、約70,000㎡、市町村41件、約63,000㎡、金沢大学1件、1,500㎡)が実施されました。ここ近年調査面積が減少気味でありましたが、昨年度に比べ、若干ではありますが、件数、調査面積ともやや増加傾向にあり、羽咋市から七尾市にかけての能登地域での調査が増加しているのが特徴です。地域別で見ますと、奥能登(珠洲市、輪島市、鳳珠群)7件、中能登(七尾市、羽咋市、鹿島郡、羽咋郡)25件、北加賀(金沢市、かほく市、河北郡)24件、南加賀(小松市、加賀市、白山市、能美市、石川郡、江沼郡)17件となっています。主なものについて、時代別に簡単にその概要を紹介いたします。

縄文時代では、珠洲市の粟津カンジャバタケ遺跡など、7遺跡が発掘調査されました。

金沢市中屋サワ遺跡で川跡が検出され、縄文後晩期の多量の土器とともに石製品、木製品、藍胎漆器などが出土し、津幡町加茂遺跡では、縄文中期から後期の川跡から洗い場と考えられる丸太を横にして杭で止めた木組み遺構や杭列が検出されるなど、当時の生業の一端が明らかにされました。また、能登町真脇遺跡では、全容が明らかとなった縄文晩期の環状木柱列の保存整備方法が検討されており、今後、本格的に史跡整備が進められるものと期待されます。

弥生時代では、白山市北安田南出遺跡など25遺跡が発掘調査されました。

北安田南出遺跡で、弥生後期(法仏期)の竪穴住居跡9棟、溝、土坑墓などが検出されており、土坑墓からガラス玉2点、管玉2点が出土しています。津幡町北中条遺跡、野々市町三日市ヒガシタンボ遺跡、羽咋市中川A遺跡、金沢市寺中B遺跡では、弥生後期・終末期の竪穴住居跡、平地式住居跡、溝などが検出されました。金沢市畝田・寺中遺跡では丸木舟を転用した井戸枠が出土しております。

古墳時代では、能美市秋常山古墳群など33遺跡が発掘調査されました。

秋常山2号墳は、半壊した1辺30mの方墳で、削平断面に露呈した埋葬施設が調査され、木棺の周囲を粘土で被覆する簡略化した粘土郭内に、竪櫛10点、白玉1624点、鉄刀2振などが副葬されていきました。小松市符津C遺跡で、墳丘が削平された5世紀代の築造と考えられる円墳1基、方墳1基が、矢田野遺跡で、墳丘が削平された円墳やオンドルを持つ竪穴式住居跡が検出されました。また、集落遺跡では、古墳時代としては最大級の建物跡が発見され、国指定史跡となった七尾市万行遺跡で、引き続き調査が行われ、竪穴式住居跡や溝跡などが新たに検出されました。金沢市出雲ジイサマダ遺跡から緑色凝灰岩製管玉未製品などが出土し、弥生時代末期から続く玉造遺跡であることが確認されました。七尾市国分B遺跡、栄町遺跡、小島西遺跡では、古墳時代中・後期の建物跡や溝跡などが検出されており、小島西遺跡から集落祭祀に使用されたと思われる子持ち勾玉2点が出土しました。

古代(奈良・平安時代)では、昨年度、板堀に囲まれた大型建物群が発見され、話題となった七尾市栄町遺跡など、40遺跡が調査されております。

七尾市栄町遺跡では、昨年度発見された板堀と別な板堀や七尾湾方向に延びる道路状遺構が新たに発見されました。宝達志水町森本C遺跡では、川跡から呪府木簡などの祭祀に関わる遺物が出土しており、墨書土器には「中山寺」、「川相」などがあることから、付近に古代寺院の存在していた可能性が考えられます。また、かほく市森ガッコウ遺跡でも、大型建物跡の存在が明らかにされ、墨書土

器、斎串、木簡などが出土しました。羽咋市中川 A 遺跡では、大型建物の 1 部と思われる方形掘方を持つ柱穴群や井戸跡が検出され、隣接する宝達志水町の杉野屋専光寺遺跡と一連の遺跡と考えられます。津幡町が行っている加茂遺跡・加茂廃寺跡の範囲確認調査では、瓦葺きの礎石建物跡の西方地点で大型掘立柱建物跡群が検出され、建物跡群の北方を区画すると考えられる大溝から多量の墨書土器（「鴨寺」、「東」、「里人」など）が出土し、さらに西の河北潟方面に遺跡が展開していることが明らかになりました。羽咋市寺家遺跡でも史跡指定に向けての確認調査が行われ、銅製帯金具、墨書土器などが出土しました。

中世では、珠洲市ヒヤマ窯跡群など、43遺跡が調査されました。

野々市町三日市 A 遺跡では、道路状遺構の両側に掘立柱建物跡や竪穴状遺構が配置された室町期の集落跡が確認されました。七尾市小島西遺跡では、溝や道路で方形に区画された屋敷跡が検出され、戦国期における町割りの一部が明らかにされました。野々市町徳用クヤダ遺跡、小松市刀荷理遺跡でも、総柱掘立柱建物跡や井戸跡が発掘されています。

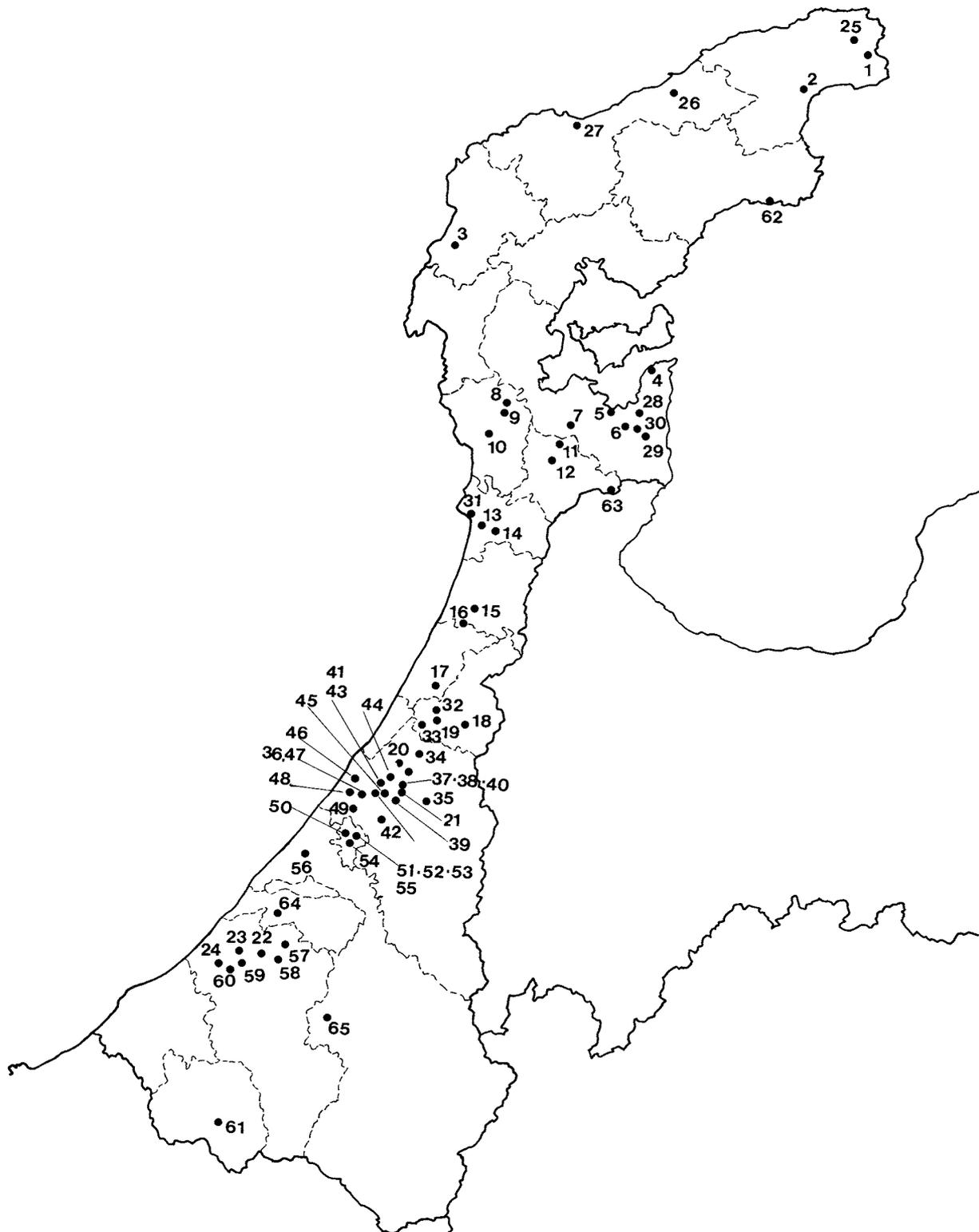
中世城館跡では、白山市鳥越城跡附二曲城跡が初めて発掘調査され、敷石の通路跡、掘立柱建物跡、貯蔵穴跡などが検出され、森本ふるさと文化財研究会が金沢市堅田城跡の試掘調査を行い、主郭部の櫓台跡、畝形阻害などの存在を確認しました。七尾城跡では、山麓に展開する城下町遺跡が調査され、敷石遺構などが検出されました。また、七尾市三室トリ C 遺跡では、七尾湾を臨む緩斜面に開かれた水田下から土塁跡、堀跡が検出され、従来知られていなかった在地土豪の館跡の存在が明らかにされました。

中能登町石動山では、「伝清水屋敷跡」の整備に伴う調査が行われ、天正期の兵火で焼失したと考えられる礎石建物跡が検出されました。七尾市東三階 A 遺跡では、周囲に溝を巡らした室町期の仏堂と考えられる掘立柱建物跡や石組み井戸跡が検出されました。

近世（江戸時代）では、金沢城跡など20遺跡が調査されました。

金沢城跡では本丸附段といもり堀跡の確認調査が行われました。本丸附段では、地下式貯蔵庫や土間状遺構などを検出、初期金沢城（寛永以前）段階では生活色の強い空間であったことが想定され、いもり堀跡では、江戸前期の堆積層から多くの越前焼瓦が出土しました。戸室石切丁場跡の調査では、俵大池地内で慶長期の城内石垣普請に伴う丁場跡が確認されました。また、金沢城下町遺跡関係では、彦三町一丁目遺跡で、東内総構え堀に面した武家屋敷跡が調査され、金沢大学付属病院改築工事に伴う宝町遺跡の調査では、経王寺の外周を巡る溝が確認されました。このほか、輪島市御蔵跡遺跡では加賀藩の米倉・武器倉跡が調査され、金沢市山科かわらば遺跡では近世後期から近代の瓦および陶器が多数出土しました。

以上、簡単に、平成16年度に県埋蔵文化財センター、金沢城研究調査室および市町教委、金沢大学で実施いたしました主な発掘調査の概要を紹介させていただきました。全国的话题になるような発見等はありませんでしたが、加茂遺跡をはじめ森本 C 遺跡、中川 A 遺跡（杉野屋専光寺遺跡）などの調査で、加賀と能登を結ぶ道沿いに宗教的施設を伴う古代遺跡が所在していたことが明らかになるなど、多くの新知見を得ることができました。また、ダム関連で発掘調査された九谷 A 遺跡が現状保存され、大聖寺にある吉田屋窯跡と共に国指定史跡に追加指定されたことは、大変喜ばしいことでありました。



平成16年度調査遺跡位置図

平成16年度 県内発掘調査一覧

遺跡名	所在地	主な時代	調査原因	調査面積 (㎡)	調査期間	特記事項
1 粟津カンジャバタケ遺跡	珠洲市三崎町粟津	縄文～中世	ほ場整備	580	4.27～5.31	遺跡の縁辺部
2 飯田町遺跡	珠洲市飯田町	中世	道路建設	1600	8.17～12.20	中世から近世の集落跡
3 飯川谷製鉄遺跡	鳳珠郡門前町飯川谷	中世	農免農道	1300	8.4～1.6	15世紀の精錬場跡
4 三室トリC遺跡	七尾市三室町	弥生・古代・中世	ほ場整備	1600	6.1～8.19	中世の館跡、製塩跡
5 小島西遺跡	七尾市小島町	古墳・古代・中世	道路建設	1290	4.22～10.6	古代の木製祭祀具多数
6 栄町遺跡他	七尾市栄町、国分町	古墳・古代	道路建設	6590	5.7～12.9	古代の板塼跡、建物跡
7 東三階A遺跡	七尾市東三階町	古墳・古代・中世	道路建設	1500	9.21～12.13	墨書土器50点以上
8 代田遺跡	羽咋郡志賀町代田	古墳・古代・中世	道路建設	2100	8.2～9.21	古代の掘立柱建物2棟
9 得田氏館跡	羽咋郡志賀町徳田	弥生・古墳・古代	ほ場整備	610	4.27～6.10	弥生・古墳の集落跡
10 北吉田ノシロタ遺跡	羽咋郡志賀町北吉田	古墳・古代・中世	河川改修	630	4.28～6.17	古墳・中世の沓濫跡
11 新庄遺跡	鹿島郡中能登町新庄	古墳・古代・中世	河川改修・道路建設	1380	5.12～8.30	古代・中世の集落跡
12 良川北遺跡	鹿島郡中能登町良川	古墳・古代	道路建設	450	6.21～7.30	古墳・古代の溝跡
13 的場農業倉庫前遺跡	羽咋市の場町	弥生～近世	道路建設	1670	8.6～12.21	竪穴、掘立柱建物、井戸
14 太田A遺跡他	羽咋市太田町・中川町	弥生～中世	ほ場整備	2480	8.31～12.24	掘立柱建物、井戸跡
15 正友じんとくじま遺跡	羽咋郡宝達志水町正友・紺屋町	弥生～中世	ほ場整備	1900	6.21～9.5、 11.16～12.28	点在する集落跡
16 森本C遺跡	羽咋郡宝達志水町森本	古墳・古代	道路建設	1510	4.19～7.23	「中山寺」銘墨書土器
17 森ガッコウ遺跡	かほく市森	古代	ほ場整備	820	9.6～11.15	一辺約90cmの方形柱穴
18 和田山堡跡	河北郡津幡町富田	中世	道路建設	4400	5.10～11.4	砦跡、小曲輪
19 加茂遺跡	河北郡津幡町加茂	縄文～中世	道路建設	24550	5.10～1.17	縄文の貯蔵穴、弥生水田
20 乙丸遺跡	金沢市乙丸町・浅野本町	弥生	鉄道建設	1300	4.26～8.6	弥生の洪水堆積層
21 金沢城跡(県庁跡地)	金沢市広坂	中世・近世	確認調査	2580	5.26～12.24	礎石建物跡、砂敷路面
22 白江梯川遺跡	小松市白江町	弥生・古墳・中世・近世	河川改修	2680	8.2～12.15	弥生の堰跡
23 小松城跡	小松市丸の内町	中世・近世	学校整備	600	4.26～6.1	道路遺構、石組遺構
24 矢田野遺跡	小松市月津町・扇原町	古墳・古代	ほ場整備	130	6.24～7.21	古代の竪穴建物跡
25 大屋ヒヤマ窯跡群	珠洲市三崎町大屋22	中世	確認調査	70	11.25～12.29	灰原、窯跡
26 寺地遺跡	輪島市町野町寺地	中世	老人ホーム建設	400	8.26～10.6	石組井戸、木組井戸
27 輪島御蔵跡遺跡	輪島市河井町	中世・近世	保健センター建設	3500	11.8～継続中	
28 万行遺跡	七尾市万行町	縄文・弥生・古墳	区画整理	1300	4月～10月	弥生～古墳の竪穴
29 七尾城下町遺跡	七尾市古城町	中世・近世	宅地造成	120	10月～2月	井戸跡、石敷遺構
30 八幡大首口遺跡	七尾市八幡町	古代・中世・近世	道路建設	1600	6月～3月	中世が主体、井戸跡
31 寺家遺跡(第17次調査)	羽咋市寺家町	古代・中世	確認調査	300	6.21～12.24	平安の掘立柱建物、銅金具
32 加茂廃寺遺跡	河北郡津幡町加茂	古代	確認調査	500	7.27～12.24	「鴨寺」銘墨書土器
33 北中条遺跡	河北郡津幡町北中条	弥生・古代	ガソリンスタンド建設	150	6.7～6.15	弥生の竪穴
34 堅田城跡	金沢市堅田町・岩出町	弥生・古墳・中世・近世	確認調査	100	10.14～11.18	主郭・櫓台跡
35 俵大池南丁場跡	金沢市俵町	近世	確認調査	2000	8.23～11.11	石切丁場
36 畝田・寺中遺跡	金沢市寺中町	古墳	住宅建設	100	11.24～12.8	古墳時代の井戸跡
37 金沢城跡	金沢市丸の内	近世	確認調査	2500	5.6～2.16	城内
38 金沢城跡	金沢市丸の内	近世	確認調査	1280	8.17～12.22	いもり堀
39 広坂遺跡	金沢市広坂	弥生～近世	博物館建設	300	2005.2.15～3.31	武家屋敷地
40 金沢大学宝町遺跡	金沢市宝町13番1号	近世	大学整備(医学部)	1500	11.9～3.31	経王寺外周の溝か
41 出雲じいさまだ遺跡	金沢市出雲町	古墳	区画整理	2700	6.19～11.8	古墳の玉造集落跡
42 山科やなした遺跡他	金沢市山科町	中世・近世	道路建設	2000	6.29～10.12	近世の窯業関連遺跡
43 桜田・示野中遺跡	金沢市桜田町・示野町	弥生・古代	区画整理	1200	8.4～12.15	古代の倉庫跡
44 彦三町一丁目遺跡	金沢市彦三町	近世	防火水槽埋設	50	7.16～8.18	武家屋敷地
45 桂町南遺跡	金沢市桂町	弥生・古墳	区画整理	1840	5.7～6.11	弥生～古墳の溝跡
46 寺中B遺跡	金沢市寺中町	弥生	宅地造成	230	10.12～11.5	弥生後期の建物跡、土坑
47 畝田・寺中遺跡	金沢市畝田西・寺中町	弥生・古代・中世	区画整理	5660	5.12～10.29	古墳の建物跡、勾玉
48 二口六丁B遺跡	金沢市二ッ屋町	古墳	事務所建設	267	5.18～6.14	
49 中屋サワ遺跡	金沢市中屋町	縄文・古代	工場建設	1200	6.24～10.18	藍胎漆器
50 三納ニシヨサ遺跡	石川郡野々市町三納	中世	区画整理	147	6.1～9.22	土坑
51 藤平田ナカシンギ遺跡	石川郡野々市町藤平田・三納	縄文・弥生・中世・近世	区画整理	4455	6.1～9.22	畝溝状遺構
52 三日市A遺跡	石川郡野々市町三日市	弥生・古代・中世	区画整理	9158	4.21～2.14	中世後期の集落跡
53 三日市ヒガシタンボ遺跡	石川郡野々市町三日市	弥生・古代・中世	区画整理	3998	4.12～12.17	後期北陸道に推定
54 粟田遺跡	石川郡野々市町粟田	古代・中世・近世	区画整理	2170	4.1～3.18	近世の集落跡
55 徳用クヤダ遺跡	石川郡野々市町徳用・郷町	古代・中世	区画整理	5072	4.12～1.26	古代の掘立柱建物3棟
56 北安田南出遺跡	白山市北安田町	弥生・古代	区画整理	12000	4.21～12.3	集落跡、ガラス玉、管玉
57 小野遺跡	小松市河田町	古代	道路改良	210	2.21～3.11	掘立柱建物跡
58 漆町遺跡	小松市白江町	弥生～中世	住宅建設	300	10.18～11.30	かんがい用の溝跡
59 符津C遺跡	小松市符津町	古墳・古代	住宅建設	271	7.14～8.30	古墳2基、掘立柱建物跡
60 刀何理遺跡	小松市矢田町	古代・中世	道路建設	2000	7.23～12.20	古代の竪穴、総柱建物跡
61 九谷磁器窯跡	江沼郡山中町九谷町	中世・近世	確認調査	68	6.7～8.19	工房集落跡
62 真脇遺跡	鳳珠郡能登町真脇	縄文	史跡整備の事前調査	50	7.26～10.28	環状木柱列跡
63 石動山	鹿島郡中能登町石動山	中世・近世	史跡整備の事前調査	2000	5.20～12.14	清水屋敷跡、礎石、井戸
64 秋常山古墳群	能美市秋常町	弥生・古墳	確認調査	150	6.29～12.6	墳輪、壘輪、鉄刀、白玉
65 鳥越城跡附二曲城跡	白山市出合	中世	確認調査	270	8.3～12.1	本丸跡、石敷路跡

(1～24は埋文センターが調査担当。25以下は、県教委、市、町、大学が調査担当。)

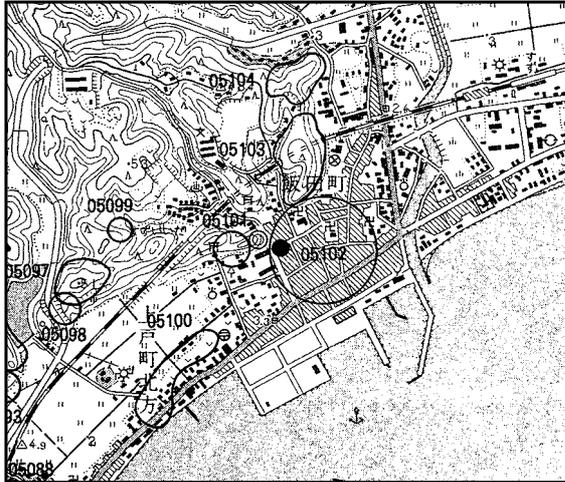
飯田町遺跡

所在地 珠洲市飯田町地内

調査面積 1,600㎡

調査期間 平成16年8月17日～同年12月20日

調査担当 伊藤雅文 西田昌弘 渡邊大輔



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査成果の要点

- ・主に中世から近世にかけての集落跡を確認した。
- ・調査区北部(1区)では近世頃の田畑を、中央以南(2・3区)においては中世から近世の掘立柱建物跡、杭列、井戸跡、区画溝を確認した。
- ・遺物としては、珠洲焼の甕やすり鉢、青磁碗、瀬戸・美濃焼の天目茶碗などが出土した。
- ・確認した建物や区画溝の軸などから、現代の町並みの基本となるような形態が、すでにこの時期に形づくられてきたことが推測される。

飯田町遺跡は東に若山川が流れ、北には通称城山と呼ばれる丘陵や春日山がそびえ立つ平野上に立地する。本遺跡の発掘調査は平成元年の調査以降2度目にあたり、今回は都市ルネッサンス石川都心軸整備事業に伴って発掘調査を実施した。

今回の調査では、主に中世から近世にかけての掘立柱建物跡や杭列、井戸跡、区画溝などが検出され、珠洲焼の甕やすり鉢をはじめとして、青磁碗、瀬戸・美濃焼の天目茶碗などが出土した。

調査区北部(1区)は城山と春日山に挟まれた谷筋の延長線上にあたり、地形的にも南半部に比べてやや低く、特に北端部では終始水がしみ出してくる状態であった。そのためか、明確な遺構は確認されなかったものの、壁面の土層観察等から、近世には田畑として利用されていたものと思われる。

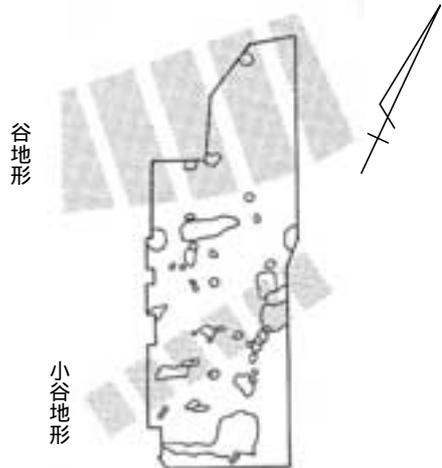
調査区中央部(2区)では杭列を検出している。その南側には切土造成した痕跡も確認でき、以南(2・3区)に広がる掘立柱建物跡や井戸跡等との関連性をうかがわせる。掘立柱建物跡は調査区外へと延びるものの、現状で2間×2間の規模をもつ1棟を確認した。柱穴は径40cm前後、深さ約30～50cmを測る。周囲には建物跡に附随する幅40cm前後の東西方向の区画溝や杭列も確認できた。

続く近世頃には南北方向にはしる区画溝が造営されている。これに附随する建物跡は確認できなかったものの、中世以降のこれら遺構群は、隣接する現道や住宅とほぼ直行ないし平行する軸をもって建てられていることが看取でき、現代の町並みの基本となるような形態が中世から近世にかかる時期に、すでに形づくられてきたことをうかがわせる。

井戸跡は計6基確認しており、その井戸枠には結桶を組んだもの、珠洲焼の甕を用いたもの、石組みのもの、石と板材を方形に組み、その内側に珠洲焼甕と曲物を入れて井戸枠としたものなど、その形態は様々である。また、井戸枠だけでなくその内部においては、結桶組みの井戸跡で、拳大前後の礫を多く敷き詰め、ろ過機能を担わせるといった、砂地の地盤に対する生活の工夫も垣間みることができた。

このように、今回の調査区は遺構密度がやや稀薄であったものの、建物の区割りからうかがえる飯田町の歴史性や、砂地の地盤に生活域をもった人々の工夫といった、当時の生活様相を把握する上で、大きな成果が得られたものと思われる。

(西田)



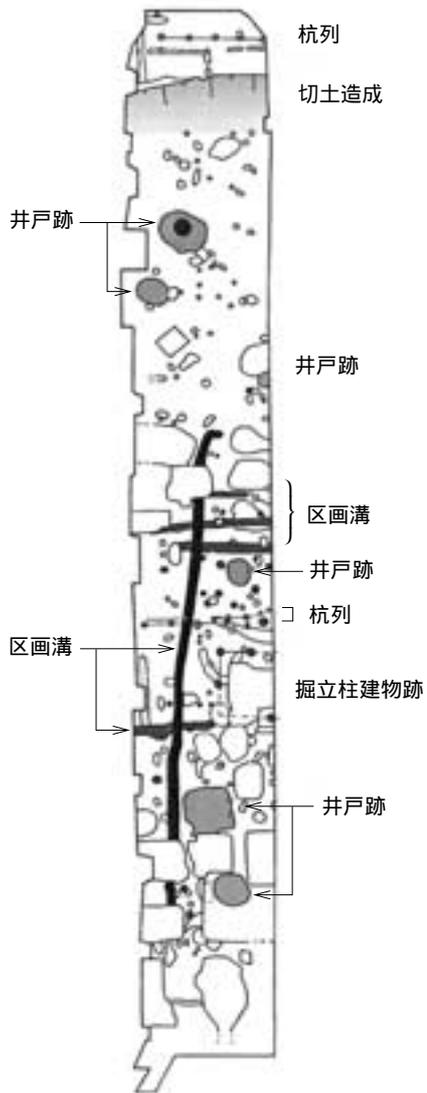
1区 遺構概略図 (S = 1 / 500)



1・2区完掘状況 (南から)



3区完掘状況 (西から)



2・3区 遺構概略図 (S = 1 / 500)



結桶組の井戸跡 (北東から)



多様な井戸杵材 (南東から)

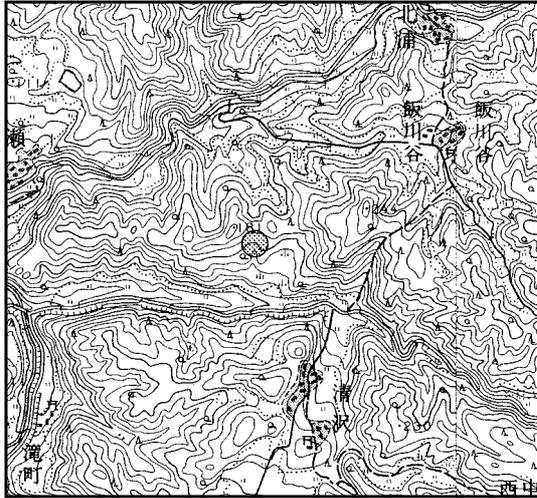
飯川谷製鉄遺跡

所在地 鳳珠郡門前町飯川谷地内

調査面積 1,300㎡

調査期間 平成16年8月4日～平成17年1月6日

調査担当 白田義彦 谷内明央



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査成果の要点

- ・本調査は広域営農団地農道整備能登外浦3期地区に係る発掘調査である。
- ・本遺跡は仁岸川の支流である北浦川上流の山間部に位置し、谷筋に挟まれた斜面と平坦面に立地する。
- ・掘立柱建物、池、炭窯、排滓場、土坑等を検出した。
- ・珠洲焼、瀬戸焼、青磁、白磁等が出土し、時期は14世紀後半～15世紀前半が主体である。
- ・出土した鉄滓は全て製錬滓であり、鍛冶滓は確認できなかった。

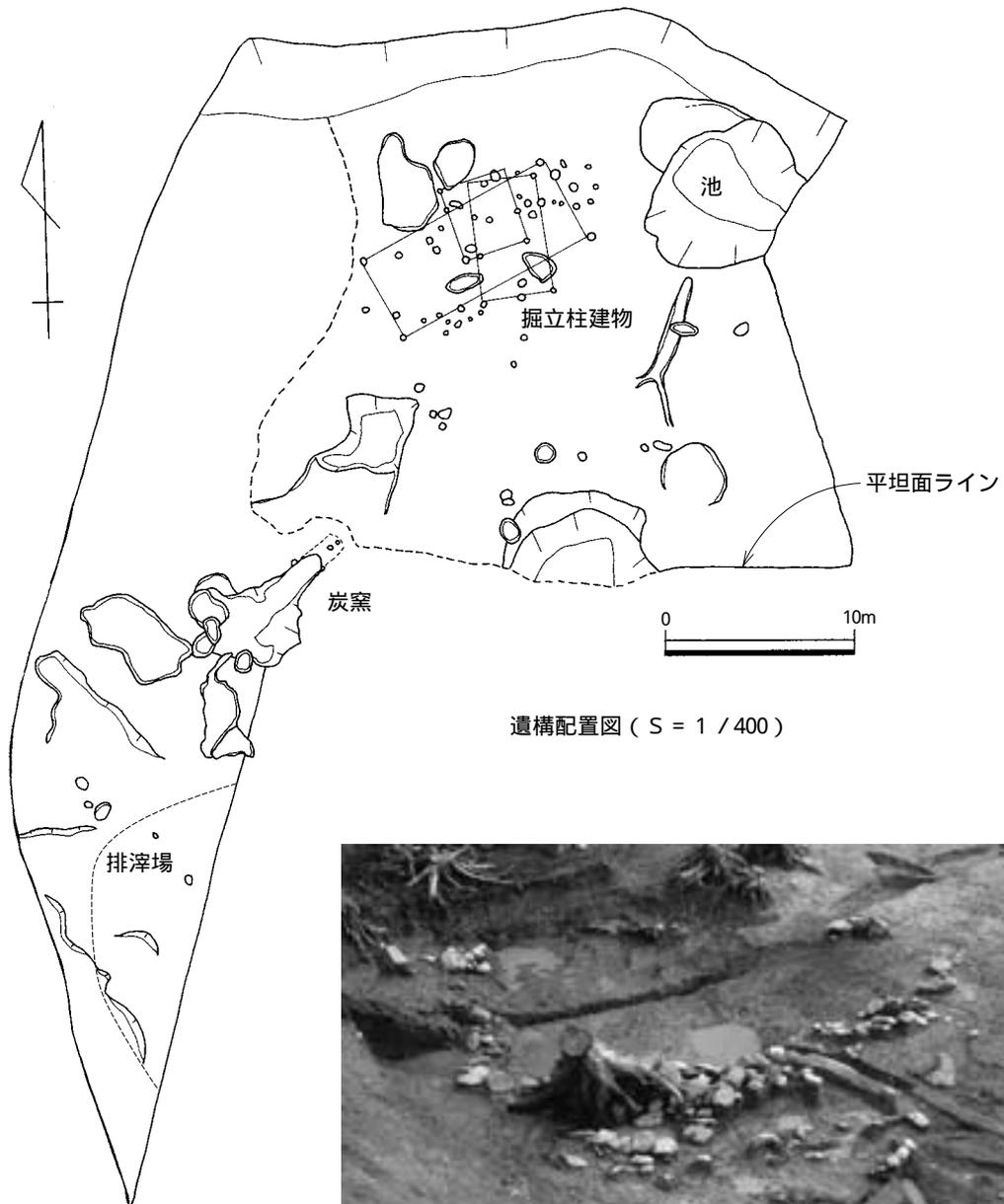
調査区は北側の平坦面と南西側の斜面に分かれる。急斜面となっている調査区北端が地すべりを起こし、裾部の土層が断層状になった自然地形をたくみに利用して整地し、平坦面を造成したものと考える。平坦面中央北寄りでは2×5間、3×2間、2×2間の掘立柱建物を検出した。3×2間と2×3間の建物は南北方向に向きを揃える。2×5間の建物は炭窯と主軸が近似し、柱穴から珠洲焼が出土した。他にも周辺に柱穴状の掘方・断面を呈する遺構を確認でき、建物設定箇所を選地していた様相が窺える。

池は平坦面北東端で検出した。大きさ40～50cmの石で周りを護岸しているが、南側では少ない。略楕円形を呈し、長軸9m、短軸7.1m以上を計測し、北側が急で南側は緩やかに立ち上がる。石列間の埋土から珠洲焼など比較的多くの遺物出土し、瀬戸の花瓶底部も確認している。湧水が激しく溜池的な機能を有していたものと考えられる。

平坦面と斜面の境には狭小な平坦面が形成されており、そこで炭窯を1基検出した。北東・南西方向に主軸を向ける地下式のもので遺存状態は比較的良好といえる。壁は地山方向に青灰色還元・赤色酸化と被熱変化しており、床は燃焼部周辺で赤黒く焼けていた。炭や焼土粒を含んだ貼床層を除去すると側壁下端沿いに走る、石・鉄滓で塞がれた排水溝を検出できた。排水溝は焚口で合流して1条となり、前庭部へと続く。前庭部では切り合った状態で土坑を5基検出した。炭窯の規模は奥壁から焚口までの全長が4.2m、窯体幅は奥壁で90cm、焼成部中央で1.3mを計測し、そこから焚口へ70cmと幅を減じている。改築前は全長4.3mと若干長めであった。2箇所ある天井の排煙口のうち南西側の方が石で塞がれていたこと、大きめの石・鉄滓で狭められた焚口を2箇所確認したこと、奥壁付近の側壁の規模が若干拡張されていること等から手前から奥の方へと改築した炭窯と判断できる。窯体の長さが古代のものに比べて短めであることや、両側壁に1箇所ずつ確認できた排煙口が窯体に密接していること等から時期は中世と想定している。前庭部は4×6.2mの規模で不整形を呈する。

炭窯南方で浅い土坑を2基検出した。床面付近で炭が散発的に出土しており、炭置き場に利用していた可能性がある。鉄滓が少量出土した。

建物群の南、炭窯の東側斜面に炉の存在が考えられ斜面中腹から谷筋の合流部にかけて鉍滓を捨てた排滓場を検出した。



池 (北西から)

今年度の調査区では製鉄炉を確認できなかったが、赤黒くて粘りのある鉄滓が主体であることから、竪型炉に伴う鉄滓の可能性が高い。また鉄滓層の上部から13世紀代の珠洲焼が出土している。製鉄炉の存在が想定される排滓場の東側斜面は平成17年度に調査を行う予定である。 (谷内)

代田遺跡

所在地 羽咋郡志賀町代田地内
調査面積 2,100㎡

調査期間 平成16年8月2日～同年9月21日
調査担当 岡本恭一 澤辺利明



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

代田遺跡は能登半島中央部志賀町の北東部低丘陵上に位置し、近くには志賀町教育委員会が昭和56年に発掘調査を行った代田菅団遺跡や、代田八兵衛地藏古墳などが所在する。

調査原因は、いしかわ広域交流幹線軸道路整備事業 一般県道松木代田線で、便宜上A・B・C・Dの4区画に分割して調査を行った。

A・B調査区では江戸時代の掘立柱建物4棟とそれに付属すると考えられる井戸や溝などを検出した。また、C・D調査区では奈良・平安時代と考えられる掘立柱建物2棟以上と多数の柱穴を検出した。

以上の調査結果から本遺跡は古代と近世に営まれた集落と考えられるが、珠洲焼片が出土していることから、中世の集落も周辺に存在した可能性がある。(岡本)



A地区完掘状況

東三階A遺跡

所在地 七尾市東三階町地内
調査面積 1,500㎡

調査期間 平成16年9月21日～同年12月13日
調査担当 岡本恭一 澤辺利明



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査成果の要点

- ・丘陵裾部に立地する遺跡である。
- ・検出遺構には、縄文時代の落とし穴、室町時代の掘立柱建物、井戸、土坑、区画溝等がある。
- ・調査区中央の谷川跡からは、縄文～室町時代の遺物が出土し、周辺に各時代の遺構が分布するとみられる。
- ・遺物は、量的に平安時代の土器が多く、瓦塔4点の他、箸状木製品、「加得」、「十」等の吉祥句を記した墨書土器約50点が含まれ、周辺に仏堂等のあることや、谷部において祭祀的行為が行われたことが推測される。

遺跡は、石動山系から流れ出し七尾西湾に注ぎ込む二宮川の右岸に面した丘陵裾に立地する。二宮川沿いの丘陵地には総数500基を超える鳥屋・高階古墳群が分布することが知られおり、遺跡背後の国造山（標高63m）周辺にも多数の古墳が築かれている。

県道七尾鳥屋線改良工事にともなう発掘調査区域は谷出口にあたり、中央部で、幅約15m、現地表から最大で深さ約3mを測る旧谷が確認された。遺構はこの谷の右岸（調査区北半部）に集中し、縄文時代の落とし穴1基や、室町時代（15・16世紀主体）の掘立柱建物1棟、石組み井戸1基、土坑、区画溝等が確認された。

落とし穴は谷下半右岸に接し、長さ約120cm、幅約60cm、深さ約60cm、底中央に小径の窪みを持つ。

掘立柱建物は、丘陵裾の緩斜面に平坦面を造り出し配置したものである。数度にわたる建て替えを反映し柱穴が錯綜するものの、規模は2間×4間程度が1棟とみている。石組み井戸は約260cm×360cmの不定形土坑を約40cm掘り下げたところ検出された。上縁には丸太により内径約170cmの方形井桁が設けられ、内径約130cm、深さ約140cmの石組みは方形をなしたとみられるが、後に崩れ始め、縦あるいは斜めに杭を打ち止めている。石材には自然石の他、五輪塔が多数転用され、井戸覆土からは漆器椀2点が重なった状態で出土した。井戸から続く溝は建物南および西側を巡り、南接する旧谷と建物を画するようである。また、土坑のうち、直径約80cm、深さ約140cmを測り、土坑上縁に方形木枠が残るSK5は、現状で湧水深度まで掘り込まれていないことから、当初溜井とみだが、やや不整形な壁・底の仕上げから、あるいは便所跡の可能性も推測される。今後の土壌分析の結果を待ちたい。

調査区中央部の旧谷は中央部が谷川をなしており、その、底付近で縄文、弥生、古墳、平安、鎌倉、室町の各時代の遺物多数が混在して出土した。多くは流入したものとみられ、周辺に各時代の遺構の分布することが推測される。また、谷奥から中程にかけて多量に出土した平安時代（9世紀後半主体）の遺物には、瓦塔片4点のほか、「加得」、「十」、「八」、「三」等の墨書土器約50点や箸状木製品などが含まれ、周辺に仏堂等が存在することや、谷部において祭祀的行為が行われたことが推測される。

（澤辺）



調査区遠景（南東から）



北東半部完掘状況（東から）



石組み井戸



落とし穴



完掘状況（俯瞰）

小島西遺跡

所在地 七尾市小島町地内

調査面積 1,290㎡

調査期間 平成16年4月22日～平成16年10月6日

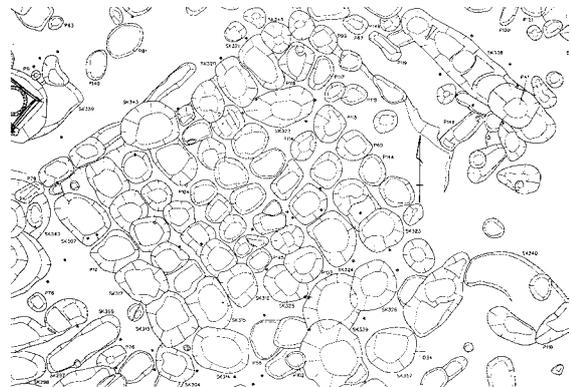
調査担当 大西 顕 横山 誠



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査成果の要点

- ・縄文～弥生時代の貯蔵穴を検出した。
- ・古墳時代の子持勾玉、白玉が出土した。
- ・8～9世紀の木製祭祀具が大量に出土した。祭祀具集中範囲の北東端を確認した。
- ・溝で区画された16世紀代の屋敷地を検出した。



F2区土坑集中箇所 (S = 1 / 150)

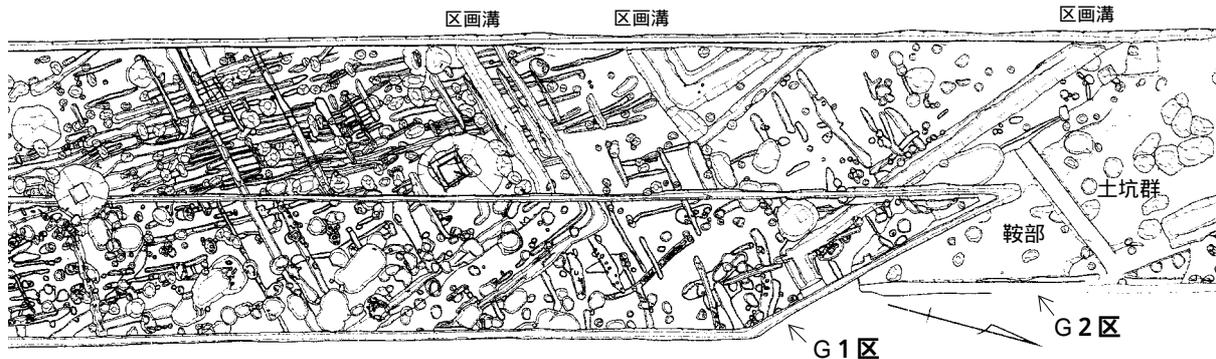
本遺跡は、能登半島の七尾湾岸に位置する遺跡で、平成14年度から調査を継続している。平成16年度は、D3区、F2区、G2区の調査を行った。

縄文～弥生時代では、G2区鞍部の底部から、土坑群が検出された。堅果類を含む土坑もあり、貯蔵穴として使用されていたものと考えられる。

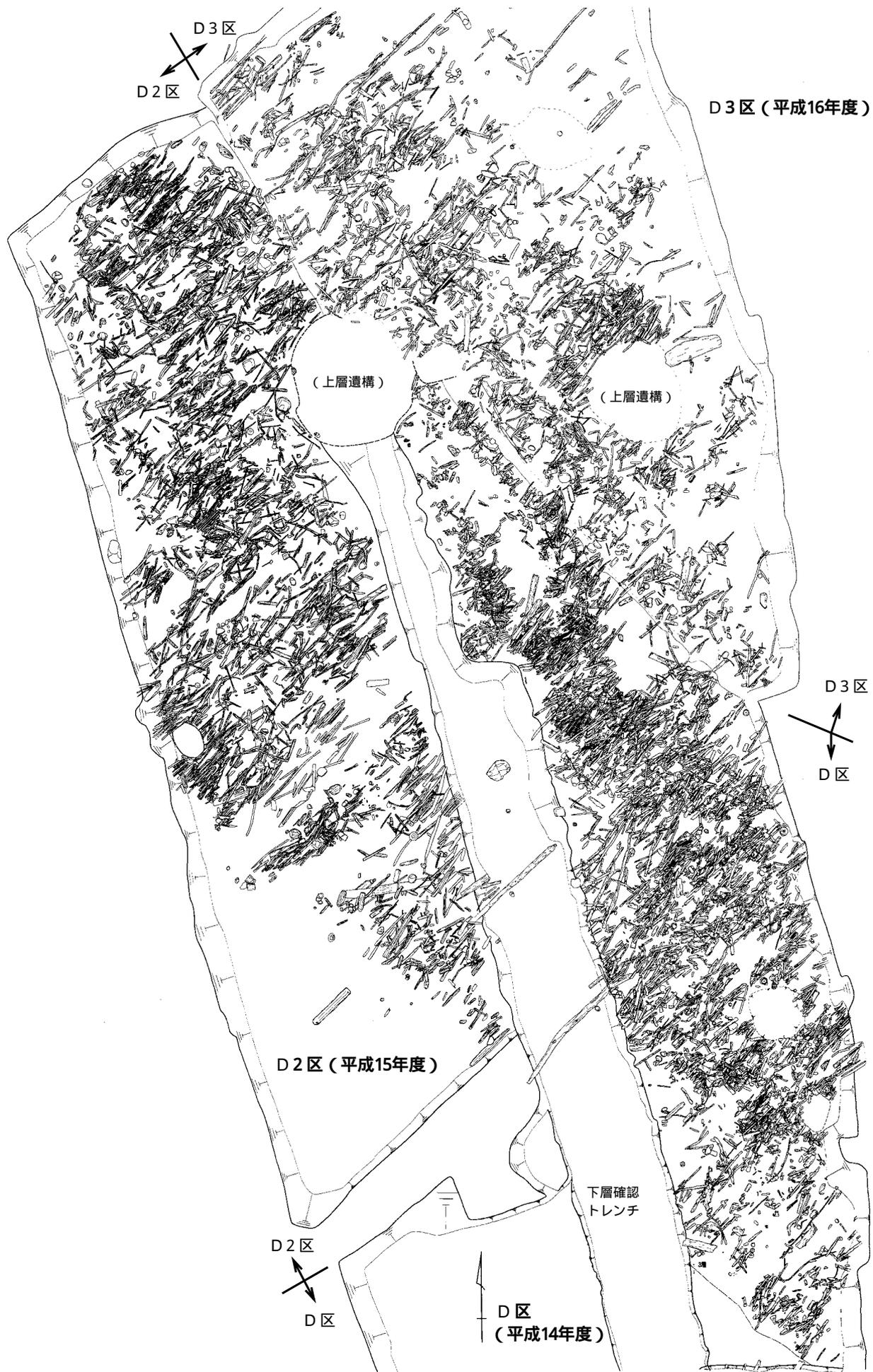
古墳時代では、G2区鞍部から子持勾玉、白玉が出土した。滑石製玉類を用いて祭祀が行われていた可能性がある。

奈良・平安時代では、D3区下層から8～9世紀代の木製祭祀具が大量に出土した。斎串、人形、棒状木製品等の種類がある。また、3カ年にわたる調査で、木製祭祀具の集中範囲は、幅約13mで帯状(北西-南東方向)に広がっていることを確認した。今後、祭祀具の出土配置、土壌分析等から、祭祀具が流れ込み的に2次堆積したものが、原位置を保つものか総合的に判断したいと考えている。

中近世では、G2区から溝で区画された16世紀代の屋敷地を検出した。また、F2区から土坑の集中する箇所を検出した。その性格として土坑墓、埋甕遺構、柱穴などが考えられる。 (大西)



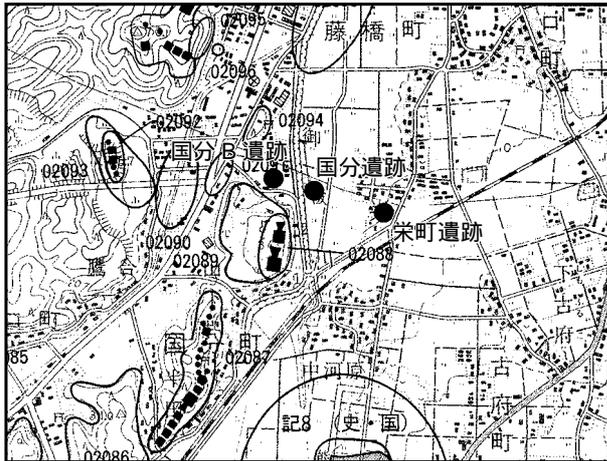
G1区(平成15年度)・G2区(平成16年度)遺構図 (S = 1 / 400)



D・D2・D3区下層 木製品(奈良・平安時代)出土状況図(S = 1 / 100)

栄町遺跡、国分B遺跡、国分遺跡

所在地	七尾市栄町地内（栄町遺跡）	調査期間	平成16年5月7日～同年12月9日
	七尾市国分町地内（国分B遺跡・国分遺跡）		
調査面積	2,280㎡（栄町遺跡）	調査担当	宮川勝次 伊藤雅和
	3,850㎡（国分B遺跡）		西田郁乃 横山 誠
	460㎡（国分遺跡）		



遺跡位置図（S = 1 / 25,000）

調査成果の要点

- ・栄町遺跡 古墳時代の建物跡、奈良・平安時代の板塀、道路状遺構、平安時代以降の畝溝、中世の井戸跡を確認した。
- ・国分B遺跡 古墳時代から古代の建物跡、弥生時代から古代の溝を確認した。
- ・国分遺跡 古代以降の溝を確認した。

栄町遺跡、国分B遺跡、国分遺跡は能登半島のほぼ中央部に位置する七尾市栄町、国分町地内に所在する。遺跡は石動山系を源とし、市内を南流する御祓川下流域に位置する。発掘調査は一般国道249号道路改良工事に係るもので

あり、栄町遺跡では古墳時代～中世、国分B遺跡では弥生時代～中世、国分遺跡では古代の遺構・遺物を確認した。以下、各遺跡ごとにそれぞれ主な遺構を概観する。

栄町遺跡

昨年度より継続調査であり、古墳中期の平地式建物、掘立柱建物、奈良・平安の板塀、道路状遺構、平安以降の耕作に伴う畝溝、中世の井戸などを確認した。板塀は溝内部に板を支える支柱穴を掘削したものであり、支柱穴は2～2.5m間隔で西面が6間以上、南面が3間で途切れ、南側に位置をずらして、6間以上続くと考えられるものである。また、溝の底面に凸凹が確認できることから、縦板塀と考えられる。道路状遺構は、側溝と考えられる2本の溝が約8mの間隔で並走しているものであり、主軸方向などから板塀が先行するものと考えられる。昨年度調査区においても、奈良・平安時代の2列の板塀や4間×7間を最大とする掘立柱建物が多数確認されており、これらとの関係が注目される。

国分B遺跡

調査区をA～C区に分けて調査を実施し、弥生から中世にかけての掘立柱建物、溝などを確認しており、中心時期は古墳と考えられる。掘立柱建物は古墳から古代にかけて3棟以上確認し、そのなかで最大のものが5間×5間（8m×6m）規模である。溝は弥生から古代の3条の溝を確認しており、弥生の溝からは、月影式を中心にほぼ完形の土器がまとめて出土しており、古墳と平安の溝からは土器と共に農具と思われる木製品や曲物の底板等が出土している。また、河跡からは古墳時代前半の須恵器や土師器の坏、蓋、甕、高坏、カマドなどがまとめて出土している。

国分遺跡

古代以降と考えられる溝などを確認した。遺構、遺物共に希薄であり、調査区東方にかけては緩やかに傾斜していることや周辺の過年度調査成果などから、遺跡の縁辺部と考えられる。（宮川）



遺跡航空写真（西から）



栄町遺跡 完掘状況



栄町遺跡 板塀（北西から）



栄町遺跡 道路状遺構（北から）



国分B遺跡 B地区完掘状況



国分B遺跡 A地区完掘状況



国分B遺跡 C地区溝遺物出土状況（東から）



国分遺跡 完掘状況（南から）

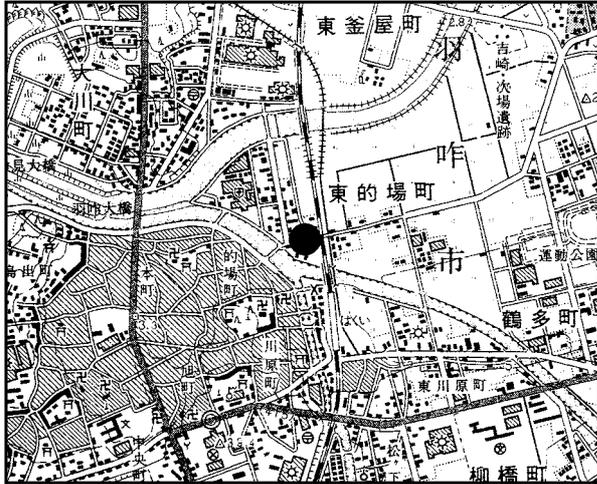
的場農業倉庫前遺跡

所在地 羽咋市の場町地内

調査面積 1,670㎡

調査期間 平成16年8月6日～同年12月21日

調査担当 浜崎悟司 山田由布子



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)



調査区位置図 (S = 1 / 1,000)

調査成果の要点

- ・ 弥生時代～近世の集落跡で、古代～中世が中心を占める
- ・ 遺構は竪穴建物跡、掘立柱建物跡、井戸、溝、土坑などを検出した
- ・ 覆屋を伴ったと推定される古代末頃の井戸1基を検出した
- ・ 側面～底部にかけて、人工的に粘土張りをした、中世の溝を確認した
- ・ 遺物は弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器、石製品などが出土している

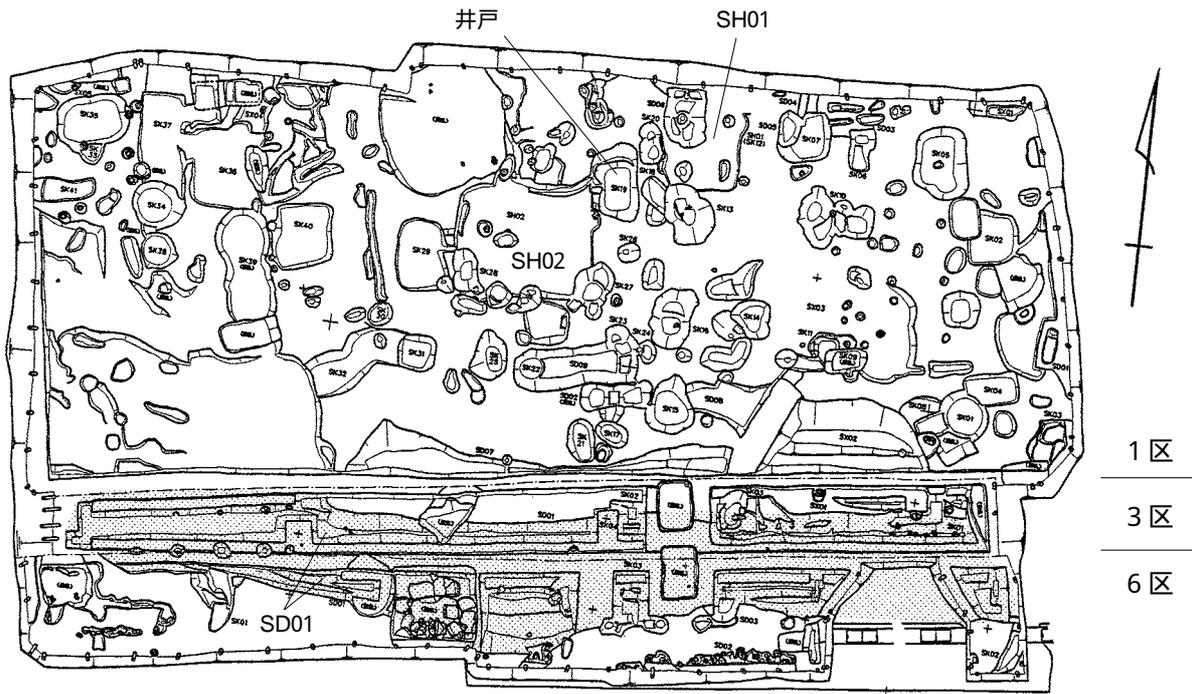
本遺跡は羽咋駅から北へ約500m、子浦川と羽咋川の合流地点から東へ約500mの地点に位置する。都市計画道路・的場飯山線の工事に伴い、発掘調査を行った。弥生時代～近世の集落跡であり、遺跡の主な時期は古代～中世である。遺跡は黄灰色砂の軟弱な地盤に営まれているが、1区と2区の間を通る市道を挟んで東側の様相は一転し、暗赤灰色の安定した地盤へ変化する。

1区では竪穴建物跡、井戸跡、溝、土坑などを検出した。SH01は平面形態が隅丸方形を呈しており、一辺約2.5mを測る小規模なものである。出土遺物より古代に属するようである。

2区は上下2面（中世・古代）を検出した。上面では掘立柱建物1棟、下面では柱列（掘立柱建物跡か）、井戸跡、溝などを検出した。SE01は縦板組隅柱横棧留めの井戸側をもつ。掘り方内の北東隅には柱が残存し、他隅にも柱穴と思われるピットが残っていることより、覆屋を伴っていたと考えられる。覆屋を伴った井戸の検出は能登において特に少なく、SE01は貴重な例と言えよう。出土遺物より古代末頃と考えられる。なお、調査区の東側では、中世以降に形成された川跡を検出した。

3区南側～6区北側にかけて、幅約3m、最大深60cmを測り、東西方向に流れる中世の溝（SD01）を検出した。溝の側面から底部にかけて調査区では産出しない白色粘土が貼り付けられており、溝の保水や保全を意図したものと推定される。土師器、珠洲焼、中世陶磁器などが出土している。

4区では、2区で検出された川跡の続きを検出した。5区では柱列、土坑などを検出したが、遺物がほとんど無く、周囲の調査状況と考え合わせ、古代～中世に属するものと推定される。 (山田)



1・3・6区 全体図 (S = 1 / 250)



2区 全景



2区 SE01 (西から)



1区 土師器皿出土状況



3区 SD01 (北西から)

おおた 太田A遺跡・太田B遺跡・太田C遺跡・太田ニシカワダ・ツツミダ遺跡・中川A遺跡 なかがわ

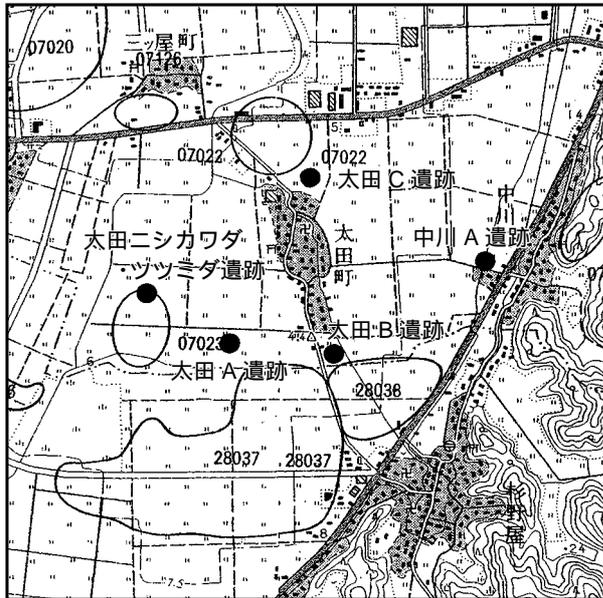
所在地 羽咋市太田町・中川町地内

調査期間 平成16年8月31日～同年12月24日

調査面積 2,480㎡

調査担当 和田龍介 安中哲徳 荒木麻理子

(太田A 563㎡・太田B 200㎡・太田C 175㎡・太田ニシカワダ・ツツミダ 250㎡・中川A 1292㎡)



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査成果の要点

- ・遺跡は全て羽咋市東部の水田中に立地。
- ・太田A遺跡 - 古代～中世までの遺構を確認。
- ・太田B遺跡 - 古代～中世までの遺構を確認。珠洲焼が出土。
- ・太田C遺跡 - 古墳時代～古代の遺構を確認。土師器がまとまって出土。
- ・太田ニシカワダ・ツツミダ遺跡
 - 弥生時代～古代の遺構を確認。弥生土器がまとまって出土。
- ・中川A遺跡 - 弥生時代～中世の遺構を確認。調査区全体に古代の遺構が濃密に分布。特に南半では大型の掘立柱建物、井戸などを検出。土師器や須恵器が多量に出土。

調査は県営ほ場整備事業中川・太田地区に伴うもので、同地区では平成13年度に行われた試掘調査により新たな遺跡の広がり確認され、平成14年度から発掘調査が行われている。主にパイプライン・用排水路敷設箇所を原因とした調査であることから、調査区は1.5m～2.0mの幅狭なものを中心となり、遺跡の全体像把握には困難を極めるが、一般国道415号道路改良に伴う発掘調査が隣接地で継続中であることから、両事業の成果を合わせて考えると理解しやすい。

平成16年度は下記5遺跡の調査が行われ、古代を中心とした多くの遺構が確認された。

太田A遺跡

過去の調査により、弥生時代後期の平地式建物跡、溝で区画された中世の掘立柱建物、江戸時代前半の集落跡などが確認されているが、今年度は平安時代～中世の小穴、溝及び土坑などを検出した。遺構・遺物共に希薄であるが、調査区の西側で集中する傾向がみられた。

太田A遺跡



遺跡完掘状況

太田B遺跡



遺跡完掘状況



珠洲焼出土状況

太田 B 遺跡

過去の調査により、方形に濠で囲まれた区画の中に、中世の掘立柱建物や井戸などが確認されている。今年度は遺跡南端部分の調査となり、平安時代の終わり頃から鎌倉時代にかけての小穴、溝などを検出し、珠洲焼などが出土した。

太田 C 遺跡

古墳時代及び平安時代の掘立柱建物、土坑、小穴、溝等を検出した。一部で土器包含層が良好に遺存しており、古墳時代前期の土師器がまとめて出土した。漆が塗られた可能性のある古墳時代の土師器が出土していることから、西側近くに所在する大田ニシカワダ遺跡との関連性があげられる。

太田ニシカワダ・ツツミダ遺跡

遺跡は過去の耕地整理などにより上部の削平を受けていたが、調査区中央から南側にかけてを中心に、平安時代の掘立柱建物数棟や井戸、土坑、小穴、溝などを確認したほか、溝から弥生時代終末～古墳時代初頭にかけての土器がまとめて出土した。

太田 C 遺跡



遺跡完掘状況

太田ニシカワダ・ツツミダ遺跡



遺跡完掘状況



土器出土状況

中川 A 遺跡

調査区全域に平安時代の遺構が濃密に分布しており、遺構面上層の遺物包含層から、土師器や須恵器が多量に出土した。特に調査区南半では隣接する、杉野屋専光寺遺跡（古代寺院跡、宝達志水町所在）に関連すると考えられる遺構群を確認し、大型の柱穴を有する掘立柱建物、溝、縦板組横棧留井戸などを確認した。調査区中央付近では、大型の土坑底から鳥形の木製祭祀具が出土している。

他にも調査区北側の溝や土坑から古墳時代終末期の遺物がまとめて出土した。また、弥生時代の平地式建物、溝、土坑などの遺構が確認されたが、散発的な分布を見せている。（安中）

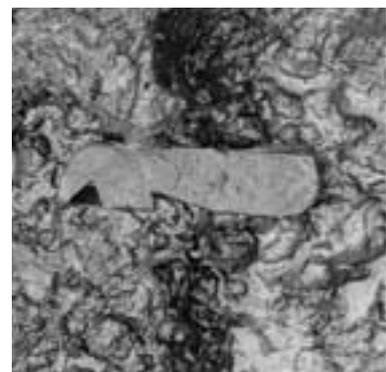
中川 A 遺跡



遺跡完掘状況



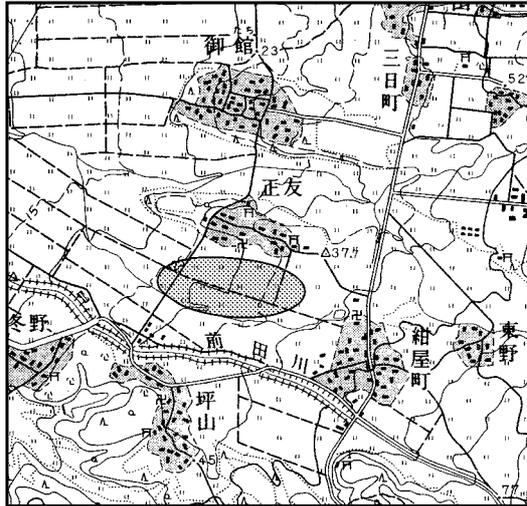
井戸跡検出状況



鳥形木製祭祀具出土状況

正友じんとくじま遺跡

所在地 羽咋郡宝達志水町正友、紺屋町地内 調査期間 平成16年6月21日～同年9月5日、
同年11月16日～同年12月28日
調査面積 1,900㎡ 調査担当 本田秀生 金山哲哉 谷内明央

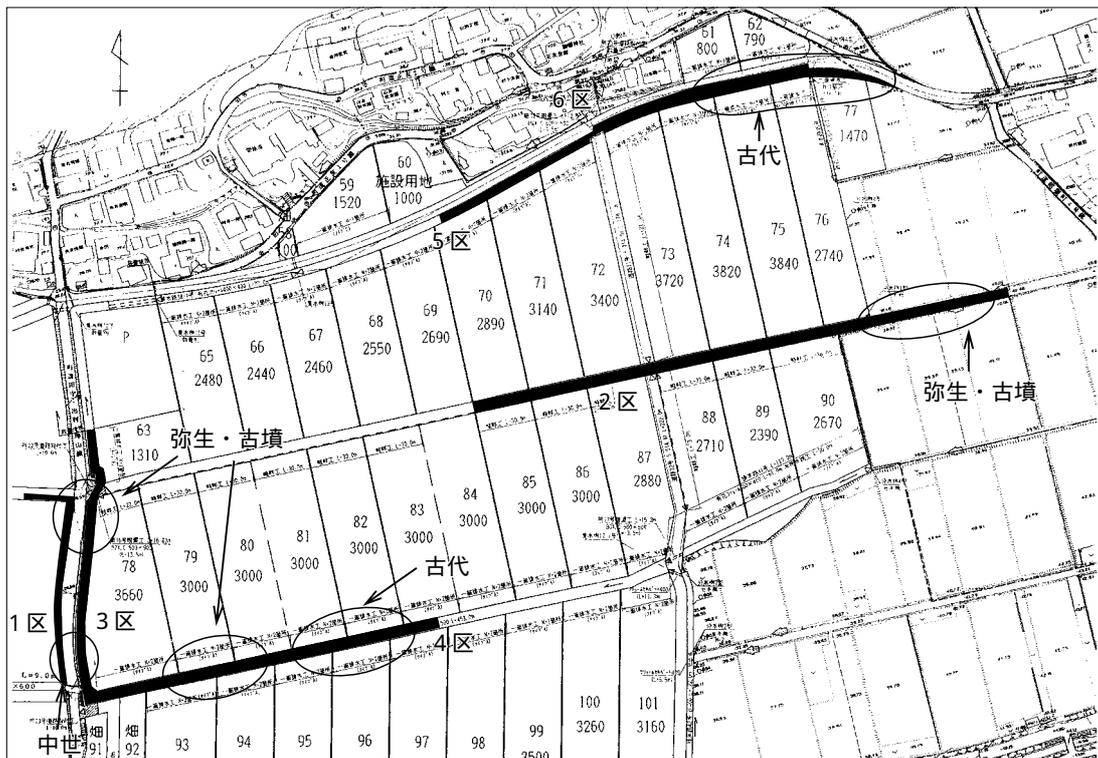


遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査成果の要点

- ・本調査は県営ほ場整備事業北大海地区に係る発掘調査である。
- ・本遺跡は宝達山より流れる前田川によって形成された扇状地扇端部に立地する。
- ・調査区は6箇所で、1区178㎡、2区420㎡、3区310㎡、4区540㎡、5区147㎡、6区69㎡、5・6区併設箇所236㎡である。
- ・土坑、柱穴、溝、ピットを検出した。
- ・弥生土器、須恵器、土師器、珠洲焼が出土した。
- ・弥生・古墳・古代・中世の遺構・遺物が局所的に集中する区域が認められた。

1区北半と3区北半・2区東半・4区西半の3箇所で弥生・古墳時代の土坑・溝・ピットを、4区東半と5・6区東半の2箇所で古代の土坑・柱穴・ピットを、1区南半と3区南半の2箇所で中世の土坑・柱穴・溝・ピットを検出した。4区東半の古代の遺構群は古墳時代の包含層を切り込んでおり、2区西半と5・6区西半の2箇所は遺構・遺物が希薄であった。遺構・遺物の集中する箇所は限られていることから、遺跡内で小集落が点在していた状況が窺える。 (谷内)



調査区の位置と遺構・遺物の集中範囲 (S = 1 / 4,000)



1区(北から)



2区(東から)



3区北(南から)



3区南(北から)



4区(西から)



4区遺物出土状況(南から)



5・6区西(東から)



5・6区東(西から)

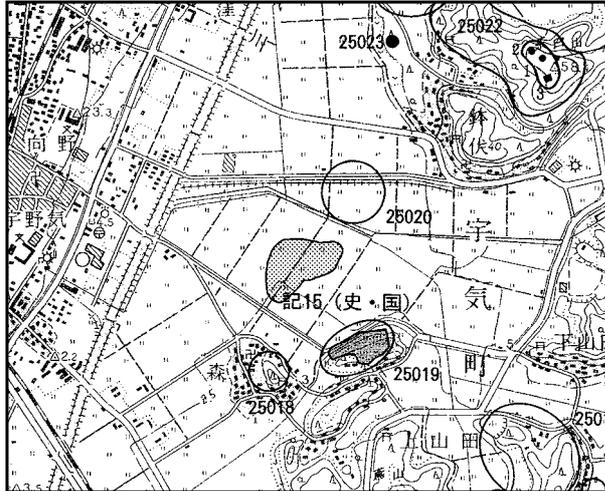
森ガッコウ遺跡

所在地 かほく市森地内

調査面積 820㎡

調査期間 平成16年9月6日～同年11月15日

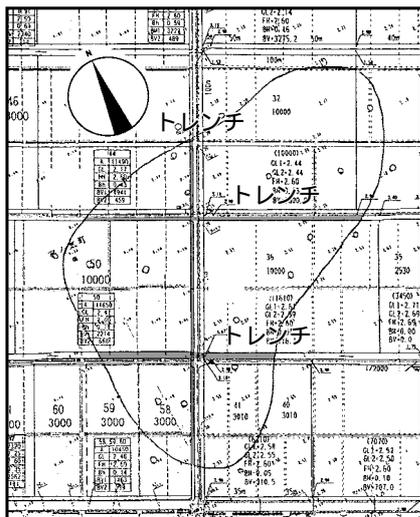
調査担当 本田秀生 金山哲哉



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査成果の要点

- ・沖積平野に立地する、奈良・平安時代の集落遺跡。
- ・出土遺物は8世紀後半～9世紀前半を主体とする。須恵器、土師器、墨書土器、木簡、齋串などが出土。
- ・一辺約90cmを測る方形柱穴で構成された2間×3～5間程度の掘立柱建物跡1棟を検出。
- ・集落の東を画すると推定される水路跡(SD42)を確認。護岸に床板材が転用されていた。墨書土器、木簡、齋串等が出土。



調査区配置図 (S = 1 / 5,000)

森ガッコウ遺跡は、かほく市森地内の、森集落から約200m北側の水田中に立地する。遺跡の北東側の水田部には鉢伏浄水場遺跡、南側には森城跡が、また南東側の丘陵上には、国指定史跡の縄文遺跡、上山田貝塚が所在、その他周辺域にも多数の遺跡が分布する。

本遺跡は、県営ほ場整備事業宇ノ気中央地区に係る試掘調査により新たに確認された遺跡であり、南北約250m、東西約100～150mの範囲の微高地上に展開する。平成16年9月より同事業に伴う排水路、パイプライン埋設箇所を対象として、820㎡の発掘調査を行った。「キ」字形を呈する調査区については、南北方向のトレンチをトレンチ、東西方向のトレンチは、それぞれ南側をトレンチ、北側をトレンチとした。遺構面は標高約1.9～2.4mで確認されている。調査

前の田面高は約2.4～2.7mであり、遺構面の大部分はほぼ耕土直下で検出される状況であった。包含層から出土する資料の主体は8世紀後半から9世紀前半に位置付けられるものであり、主な遺構も同時期に属するものと考えられる。遺構はトレンチの北側に集中しており、とりわけトレンチ及び同トレンチと交差するトレンチの北半部分の密度が高く、対するトレンチ南半は希薄な分布状況を呈する。

最も注目されるのは、トレンチ東半部で検出した一辺約90cmを測る方形の大型柱穴をもつ掘立柱建物跡である。当該建物跡についてはトレンチを斜行する位置で確認されたことから、調査区内では3基の柱穴を検出するにとどまった。建物規模及び主軸方向については、攪乱により確定はできなかったものの、調査区域外の試掘結果から少なくとも東西方向を主軸とする2間×3～5間程度の規模を有する建物であるものと考えられる。

トレンチ 東端部では、床板を転用したものとみられる板材により護岸された、幅約5mの水路跡(SD42)を検出している。当該水路跡については、その周辺の遺構密度が西側に比して著しく希薄であることから、集落の東限を示す水路であると考えられる。同水路跡からは、「千」及び「壬(あるいは千一)」と書された墨書土器各1点をはじめ、単位の「石」のみを残す付札と推定される木簡1点、斎串2点などが出土した。

この他にも、トレンチ の北半部では、直径50cm前後の柱穴10基以上を検出、内3基については礎板を確認。また、トレンチ においてもトレンチ を挟み東西各10基以上の同様の規模の柱穴と推定される多数のピットや、同トレンチ西端部では井戸跡と推定される大型土坑1基を検出した。遺物で特筆されるものとしては、上述の水路跡以外から出土したものとして「石山」、「仁」、「田中」と記した墨書土器や、須恵器の転用硯、ヘラの代わりに漆で「十」字記号を付したするなど、漆が付着した須恵器が多くみられることなどが挙げられる。

このような状況から、棟数や規模、変遷については不明であるが、本遺跡の南東部は大型柱穴を有する掘立柱建物が、また北西部は直径50cm前後の柱穴をもつ掘立柱建物が、それぞれ分布する区域であると理解することに問題はないだろう。大型建物を含む複数の建物の存在や文字資料などの出土遺物からは、本遺跡が官人あるいは有力者の居館を含む集落であった可能性が想定される。本遺跡付近に古代北陸道のルートを想定する案もあり、幹線道に近接する可能性のある遺跡としても本遺跡は注目されよう。

平成17年度にはトレンチ に併走する農道部分の調査を予定している。幅狭の調査区のため不明な点の多い今回の調査に比して、より多くの成果が得られるものと期待される。(金山)



トレンチ 北側完掘状況



トレンチ 東側完掘状況



トレンチ 東側掘立柱建物跡完掘状況



トレンチ 東側 SD42調査風景

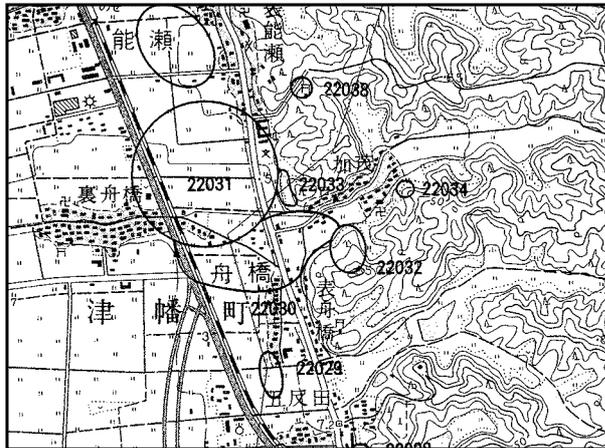
加茂遺跡

所在地 河北郡津幡町加茂地内

調査面積 24,500㎡

調査期間 平成16年5月10日～17年1月17日

調査担当 久田正弘 仲村正一 立原秀明 松尾 実
鈴木真之 空良寛 竹田麻里子 稲垣淳平



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)



調査区位置図 (S = 1 / 5,000)

本年度も各調査区とも複数の遺構面を調査しており、調査区毎の概要を報告する。調査区の名前は平成14年度からの区割りであり、16年度はF、H、J、K、L、M区を調査した(第2図)。

F区 当調査区は第3面からの調査となり、2面を調査した。第3面は古墳時代前期頃の面であり、谷奥から蛇行する東西方向の流路(写真)を2本検出し、土器片が多量に出土した。北側は多くの植物痕跡があり、南側に潜っていることが判明し、第4面として掘り下げた。時期は弥生時代中期後半頃であるが、第3面の流路2本の残りとは多量の植物痕跡を検出した。

H区 当調査は第2面からの調査となり、5面を調査した。第2面は古墳時代の面であり、溝や近世の溝などを検出した。第3面は弥生時代中期後半の面であり、検出面は5.3~5.5mである。小穴と植物痕跡、F区で検出した古墳時代前期頃の流路を検出した。流路に接して2間×2間の掘立柱建物(棟持ちか、写真)を一棟検出し、中期後半頃と思われる。西側のG区で昨年度検出された周溝を持つ竪穴式建物との関連が想定される。第4面の標高は4~4.2mであり、腐植(ピート)層を埋土とする流路を検出し、その中と周辺に縄文時代晩期頃の貯蔵穴を7基確認した。実が取り出されたもの

もあるが、トチの実、椎の実が貯蔵されていた。第5面では標高3.7~4mで、集石遺構や流路を検出した。

流路は河道の左岸の肩部を検出し、南西から湾曲して北方向に流れていた。上層からは縄文時代後期後葉の土器が出土し、流路の覆土は砂や小礫層が堆積しており、流れの速い流路と想像される。流路内には細い丸太や漆の可能性のある割材を円形に打ち込んだ遺構(写真)が2基、流路と直行する木組み遺構を検出した。付近から縄文時代後期中葉と思われる小型壺形土器が出土し、流路の底からは、後期前葉の土器、黒曜石の剥片石器などが出土した。よって、上記の木を利用した遺構の時期は後期中葉~後葉と思われる。第5面を若干下げた第6面(第3図、写真)では流路幅が東側に広がることが判明し、中期後半の土器が出土した。北側にも円形の杭列(写真)があり、時期は中期後半~後期前半頃と思われる。第5・6面とも流路の深さは約1.5mであり、流路内には巨大な自然木(広



H区第6面平面图



F区第3面 流路



H区第5面 円形杭列



H区第6面 流路全景



H区第6面 円形杭列



H区第3面 掘立柱建物



Hc区第1面 溝



J区第4面 貯蔵穴群



K区第4面 全景

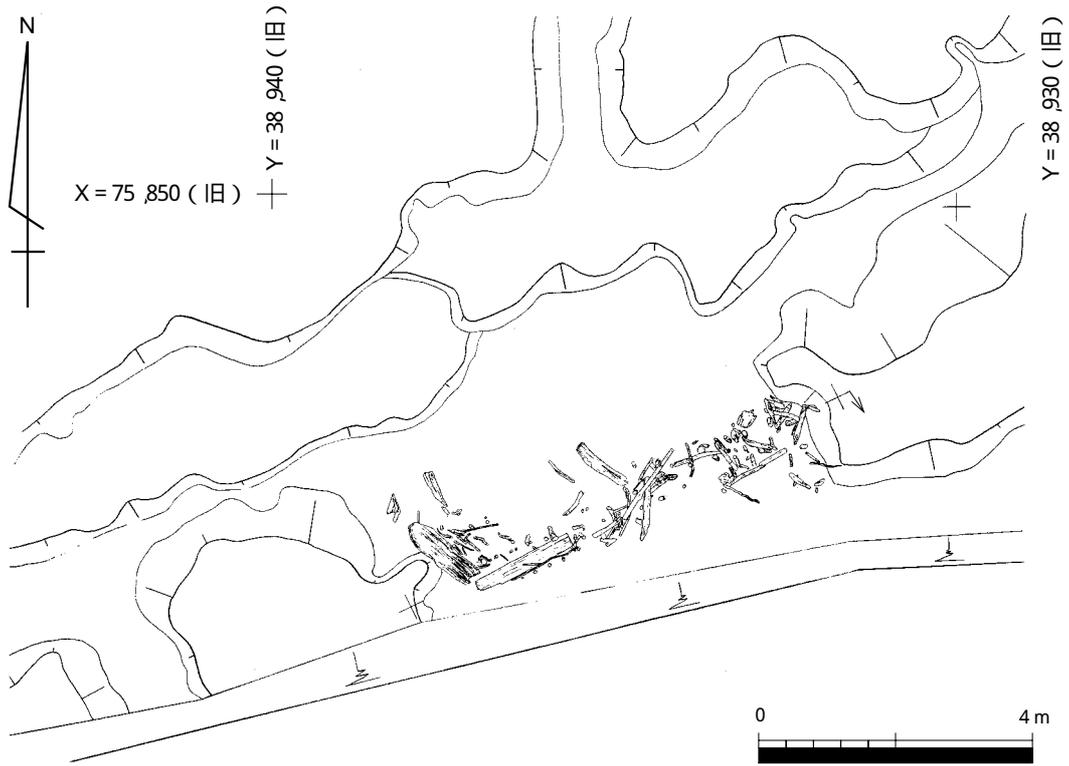
葉樹主体)が多く出土した。自然木の両端を観察しても明確な人為的痕跡が見出せなかったので、流木の集まり、貯木場、作業場などの色々な可能性を提示しておきたい。(松尾 稲垣)

Hc区 調査範囲が狭い為に2箇所のトレンチ調査を実施した。南側のトレンチでは3面を調査し、第1面では溝(写真)から近世の漆椀、瀬戸椀片などが出土した。溝は現在の道路・用水路よりも西に振れる。溝に沿って等間隔に小穴(杭列か)が認められた。南側のG区(平成15年度調査)では、落ち込み(溝)から近世の漆椀などが出土した。調査中、明治23年発行地籍図と現在の地図を合成した資料を津幡町教育委員会戸谷邦隆氏から提供して頂いた。当調査区とG区で検出した溝の方向は地籍図に描かれている能登街道東側にある溝(用水か)の位置と符合した。能登街道本体は確認されなかったが、近世における能登街道の確認ができたと思う。近世における村落景観復元に考古学的なアプローチができたことは貴重な成果である。第2面は弥生時代中期後半頃の黒色層の上面であり小穴など、第3面は黒色層を除去した面であり、植物痕跡を検出した。(松尾 稲垣)

J区 当調査区は南側の低丘陵に接しており、4面、南側ではもう2面調査を実施した。第1・2面では中世～古代と思われる水田跡、小穴群、溝などを検出した。第3面では古代の土坑、流路などを検出し、流路からは木製品、土器等が多く出土した。第4面の北側は弥生時代中期後半～古墳時代であり、古墳時代前期頃の流路、小穴、土坑を検出した。小穴は弥生時代中期後半頃の植物痕跡と思われる。北東側には数基の貯蔵穴があり、トチ、ドングリなどが出土し、時期は弥生時代と思われる。南側(丘陵裾)は古墳時代～古代の面であり、流路を検出し、木製品、土器などが出土した。流路には2列に連なった杭群(第4・5図)があり、その間に長方形の板材が据えられており、足場と考えられる。流路の中の杭は傾きによって3グループに分けられるが、これらはしがらみの可能性を考えたい。なお、この流路では、古墳時代中期～後期頃の甑や古代の土器や習字木簡「是是・・・」などが出土しており、南側にある低丘陵の中腹に古墳時代中期の居住域があったものと思われる。第4面南側には腐植物層が北側に緩く傾斜した地点(第5面)が確認され、矢木ジワリ式(弥生時代中期前半)の条痕文土器が出土した。第6面は縄文時代の面と思われ、流路と貯蔵穴と樹木痕跡などを検出した。H区5面の流路上流部と別の流路を検出し、自然木が多量に出土した。時期は縄文時代(後～晩期)と思われる。2基の貯蔵穴が検出され、トチ、ドングリなどが出土した。(松尾 空 稲垣)

K区 当調査は第2面からの調査となり、4面を調査した。第2面は古代の溝などを検出した。第3面では古墳時代頃の溝を確認した。西側のC区で検出した溝の上流であり、水田の用水・排水としての機能を有するものと思われる。第4面は弥生時代中期後半であり、多くの植物痕跡(写真)を検出した。第5面では弥生時代中期後半以前の流路の一部を検出した。(松尾)

L区 当調査区は6面を調査した。第1面では、古代の東西方向の流路、溝、小穴、落ち込みを検出したが、一部中世～近代に属するものもある。古代の流路(写真)からは木製品、土器片が多く出土した。第2面では、弥生～古墳時代の流路、弥生時代後期後半～古墳時代前期の溝を検出した。溝は東西方向に流れており、土器片、木製品が出土した。溝と同時期かやや古いと思われる埋没水田(写真)を検出した。微低地に立地しており、小区画水田に水口がつくのが確認された。北側のB区では水田がやや高い位置で検出されており、やや低いL区にかけて地形の起伏を利用して水田を造成していたことが判明した。第3面は弥生時代中期後半と思われる面であり、流路跡と植物痕跡と小穴を検出した。流路跡からは太型蛤刃石斧(長野県善光寺平産)や磨製石鎌が出土した。第4面は縄文時代と思われる面であり、小さな落ち込みと流路跡と樹木根痕を検出した。流路からは敲石が出土したのみだが、縄文時代晩期頃と想定したい。第5面では流路と落ち込みを検出したが、遺物は出土しなかった。しかし、貯蔵穴があり、トチの実が出土した。5面の東側に設置した排水溝から縄文土器



J区第4面平面图



J区第4面杭群平面图·立面图

片が出土したので東側のみ（第6面）を調査した。基本層位は灰色砂層であり、幅4m以上深さ1.8m程の流路を検出し、縄文土器片10点ほどが出土した。（松尾 空 稲垣）

M区 現在の町道部分を全面に調査することが困難なため、K・J区の間にはトレンチを設定して調査を実施した。南北方向の溝を検出したが、Hc区で確認した能登街道際にある溝は存在しなかった。調査結果や地籍図から勘案して能登街道は本調査区よりも西にあると考える。（松尾 稲垣）

まとめ 本年度調査区は、北から南に向かって微高地 低地 微高地になることや東から西（谷奥から平野）へと傾斜しながら堆積していった状況が確認でき、小谷から沖積地への複雑な地形の形成過程が看取された。また縄文時代中期後半以降の流路が多く確認され、幅は広くて砂と小礫が主体なために水流は激しかったと思われる。しかし、弥生時代中期後半～中世にかけての流路は幅は狭く、ピートが多いことから、水流は弱く、付近は後背湿地であったと思われる。弥生時代後期以降は用水路的溝や水田跡も確認されており、連綿と生産域であったことが伺えた。しかし、H区では弥生時代中期後半頃の建物が存在し、J区・L区東端では古墳時代後期～古代の遺物が多く出土しており付近（南側丘陵中腹）に居住域が存在する可能性が判明した。（松尾）

加茂遺跡の調査区（第1・2図）は舟橋川によって形成された小谷（幅150m）の中央～南側と西側の平野部にあたる。10次におよぶ調査成果により古代以前にも人々の生活を確認することが出来た。標高4m以下では縄文時代中期後半～晩期頃の流路や貯蔵穴などが確認されたが、土器・石器の出土量は多くないので居住域は、やや離れていたと思われる。流路は谷南側で大きく蛇行していたが、縄文時代晩期頃に現在の舟橋川付近の北側に大きく流れが変わったと想定される。それ以降、流路の本流は谷北側を流れ、谷南側は後背湿地になり、流路も細いものとなったようである。弥生時代中期後半では谷中央部にある舌状の微高地に集落の立地が確認され、弥生時代後期後半～古墳時代前期では集落が丘陵上や西側の平野部に確認され、間には水田が造成されていたようである。古墳時代後半では丘陵裾付近と丘陵中腹などに集落が展開していたようである。古代・中世では谷中央部と西側の平野部に集落が確認され、周辺には水田が存在したようである。集落が立地していた微高地も近世以降は水田となって現在に至ったことが判明した。（久田）



L区第1面 流路など



L区第2面 小区画水田

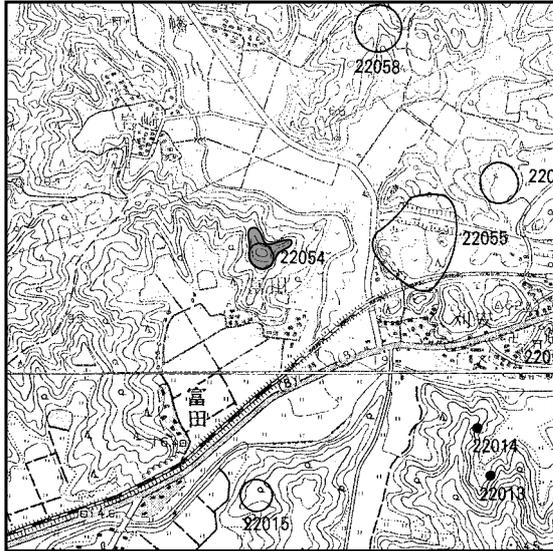
和田山堡跡

所在地 河北郡津幡町富田地内

調査面積 4,400㎡

調査期間 平成16年5月10日～同年11月4日

調査担当 布尾和史 岩瀬由美



遺跡位置図

遺跡は、津幡川に沿って形成される沖積平野を望む丘陵上にあり、俱利伽羅峠と金沢・津幡を結ぶ谷筋の往来を望む場所に位置している。

周辺には俱利伽羅城跡をはじめ、龍ヶ峰城跡・原城跡・竹橋城跡や鳥越弘願寺・笠野鳥越城跡・田谷御前山砦跡など中世～戦国期にかけての砦跡も多く、加賀・能登・越中を結ぶ回廊の結節点として、重要な地域であったことが遺跡の分布から窺える。

和田山堡跡もそうした遺跡の1つに数えられ、規模は小さいながらも、曲輪・切岸・豎堀・堀切などからなる砦跡として知られていた。

今回は、津幡北バイパス整備事業一般国道8号改築工事に伴う発掘調査であり、路線に隣接する砦本体(C区)の測量調査と、路線内に位置し削平の対象となる砦の一部(A区・B区)の発掘調査を行った。

砦本体(C区)は発掘調査区(A区・B区)に挟まれた標高の最も高い部分にあり、調査区は砦の一部をなす。A区では斜面に小規模な平坦面が確認されるとともに、砦本体寄りの場所で多数の小穴が確認されており、簡易な構造物が存在していた可能性が考えられる。B区では、尾根上で標高の最も高い部分が平坦面として削りだされている。曲輪が配されていたものと見られ、略長方形に並んだ状態の柱穴も確認されている。曲輪は一部損壊していたが、周囲では切岸・堀切も確認できた。

他には、落とし穴状の穴や平安時代末の土坑も確認されており、砦となる以前からの土地利用の一端も明らかとなった。(布尾)



航空写真

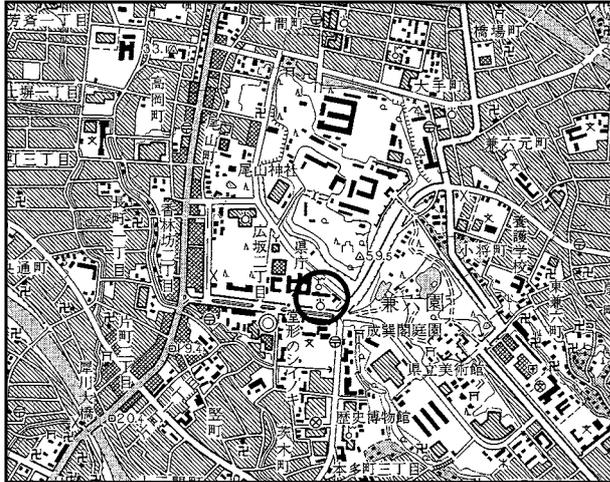
金沢城跡(県庁跡地)

所在地 金沢市広坂2丁目地内

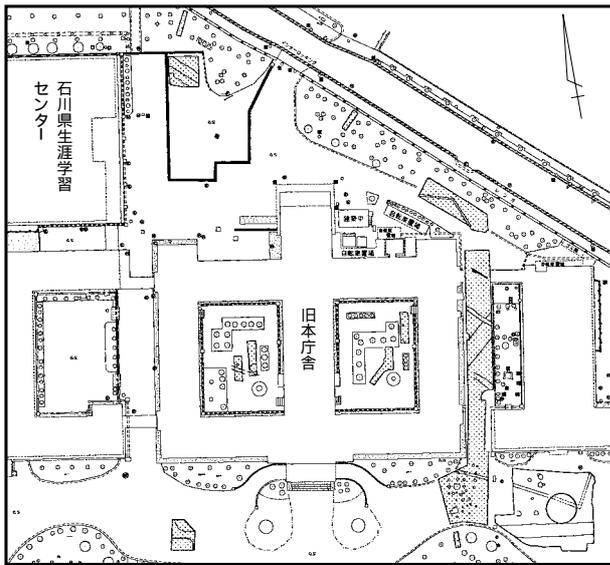
調査面積 2,580㎡

調査期間 平成16年5月26日～同年12月24日

調査担当 松山和彦 伊藤さやか



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)



調査区位置図 (S = 1 / 2,000)

前年度に続いて行われた平成16年度の県庁跡地(金沢市広坂2丁目地内)の埋蔵文化財確認調査は、中庭を含む旧日本庁舎の周辺部が対象とされた。県庁跡地周辺は、江戸時代初期から加賀藩の的場・馬場・米蔵等の施設があり、前期頃からは「堂形」と呼ばれる米蔵を中心とした蔵屋敷地となっていたことが文献資料から判明している。

調査の主な成果としては、礎石建物や砂敷路面の確認があげられる。礎石建物は、旧日本庁舎東南の調査区で現地表下70cmから数棟が重複するように確認された。そのうちの1棟は、南北5間(約9m)、東西2間(3.6m)以上で、礎石根固めから江戸後期(18世紀後半～19世紀前半)の遺物が出土しており、19世紀前半頃の建物と考えられる。建物遺構の南側には、内法約80cm×75cmの方形石積み遺構も確認している。これらの遺構は、江戸後期の絵図に見られる堂形入り口部の番所の建物と付属施設に該当する可能性が高い。

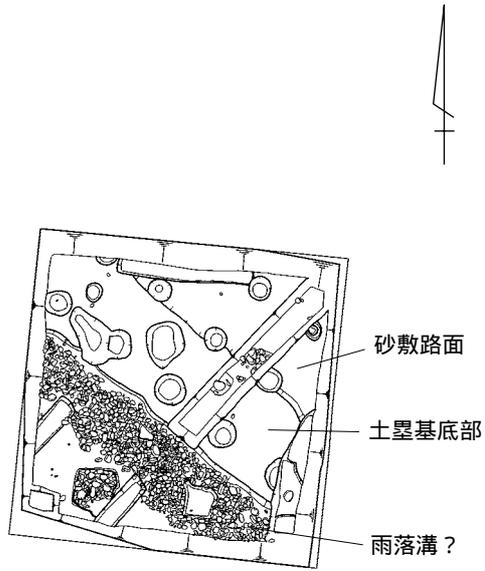
また、石川県生涯学習センター東側の調査区では、現地表下1mで堂形馬場に伴うと考えられる砂敷路面を確認した。砂は厚さ約10cmで均等に堆積していた。その他、南東から北西方向に延び馬場南縁を区画する土塁の基底部も見つかっている。その土塁に沿うように河原石を敷き詰めた石敷遺構も確認しており、馬場に沿って建てられた米蔵に伴う雨落溝等を想定している。これらの遺構は出土遺物や土層の堆積

状況等から、寛永の大火以降に構築されたものと考えられる。文献資料と照合したところ、万治3(1660)年に堂形に造営された馬場の遺構に対応すると思われる。

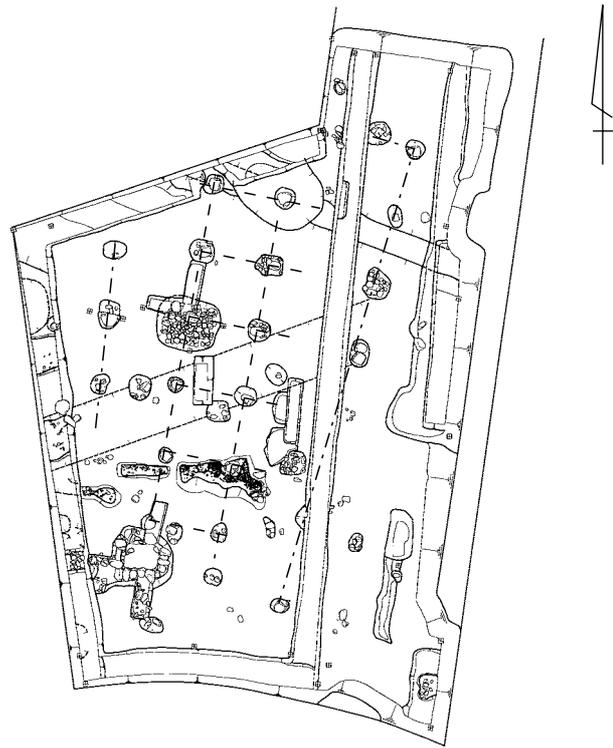
旧日本庁舎東側では道路遺構が確認された。路盤は砂礫土で整地されており、幅4.5m(2間半)で両側に縁石と幅約1mの側溝を伴っている。延長約15mを確認している。その規模の面から堂形内の基幹道路と推定されるが、既存の絵図類には記載がみられず、堂形初期(江戸初期～前期)の道路跡と想定される。また、米蔵が立ち並んでいた場所にあたる旧日本庁舎中庭からも、米蔵の基礎と思われる大規模な礎石が1基見つかっている。

前年度の調査結果も含めると、県庁跡地では古代から江戸後期までの大きく4時期に分けられる遺構が、比較的良好に遺存していることを確認した。堂形の成立以後の土地利用の変遷を明らかにしていく上で重要な成果であると思われる。

(伊藤)



石川県生涯学習センター東側の調査区 (S = 1 / 200)



本庁舎南東側の調査区 (S = 1 / 200)



堂形の馬場



堂形番所の礎石建物



本庁舎東側の調査区 道路遺構



本庁舎中庭の調査区

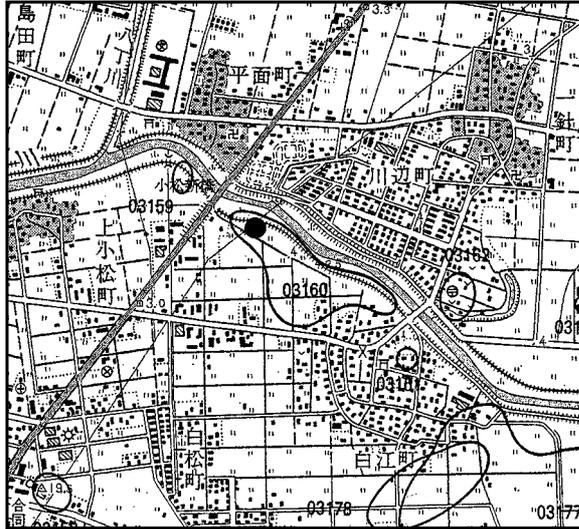
白江梯川遺跡

所在地 小松市白江町地内

調査面積 2,680㎡

調査期間 平成16年8月2日～同年12月15日

調査担当 立原秀明 竹田麻里子



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

白江梯川遺跡は、梯川が蛇行する中流から下流域にさしかかる左岸に位置する。本調査は梯川河川改修事業に伴う発掘調査である。本遺跡の調査は今年度で11次調査であり、1次調査は昭和57年に行われている。これまでの発掘調査の結果、弥生時代後期末から古墳時代後期、平安時代中頃から中世に断続的に営まれた複合集落跡であることが確認されている。

今回の調査では第1面(上層)、第2面(下層)、第3面(最下層)の調査を行った。概要は以下の通りである。

第1面(上層)

中世以降と考えられる南 - 北方向にのびる溝数条と近世末～近代頃の北東 - 南西方向にのびる溝1条を検出した。



第1面(上層)完掘状況(西から)



近世溝(西から)

第2面(下層)

弥生時代後期～古墳時代前期頃の水田遺構を検出した。水田は調査区の北東部で検出され、小区画水田4枚以上と東 - 西方向にのびる水路1条を確認した。小区画水田の1区画は約2m×2mの大きさで、畦畔には水口とみられる切れ目もみられた。



小区画水田（北から）

第3面（最下層）

弥生時代中期～後期頃と考えられる溝6条以上を検出した。溝群は全て東 - 西方向にのびており、西端で南にふる。これらの溝の検出地点はほぼ変わらず、重なっているものもあった。堰とみられる複数の杭が検出された。取り上げてみたところ深く打ち込まれているものが多く、平均30cm、特に深いものは76cmもあった。深く打ち込まれていたものは建築部材の転用と思われるものであった。溝からは、少量ながら土器、砥石などとヒスイ1点が出土した。ヒスイには穴が開いていたが、形は整っていなかった。



第3面（最下層）完掘状況（西から）



ヒスイ玉

今回調査した計3面は、遺構・遺物ともに希薄で集落跡と直接関係する遺構がほとんど確認出来なかったが、第2面（下層）でこれまでの白江梯川遺跡の調査では検出されていなかった水田遺構を確認することが出来た。次年度も調査が予定されており、本調査区の東側も調査範囲に含まれるため、水田遺構のひろがり確認されることを期待したい。（竹田）

平成16（2004）年度下半期の遺物整理作業

企画部整理課

1班

大長野 A 遺跡（小松市、平成 8・9 年度調査）の実測・トレース作業を引き続き実施した後、鉢伏浄水場遺跡（かほく市、平成15年度調査）、三室トリ A・トリ C 遺跡（七尾市、平成15年度調査）観法寺谷遺跡（金沢市、平成11年度調査）の整理作業を行った。興味深かったのは、観法寺谷遺跡の整理作業の中で、かわいい形の良い碁石が40点以上も出土していたり、木製品で箸が多量に出土していた。この箸は、食事だけに使われたのか、いろいろ意見が飛び交った。（松田智恵子）

2班

梅田 B 遺跡（金沢市、平成11年度調査）の整理作業は、記名・分類・接合から、土器・木器・金属器・石器の実測・トレース、遺構図のトレースまでを行った。実測土器は底部に糸切り痕を残す土師器の椀や皿、手づくねの椀などの小型土器が多くを占め、近世の磁器もわずかだったが見られた。木器では加工痕のくっきり残る矢板や杭、状態が悪くなった柱根。石器では剥離の見えづらい石錘や見えすぎる剥片。いろいろな遺物を様々な視点で観察し、正確に実測・トレースする事のむずかしさを改めて実感した。（北 寿栄）



土器の記名（1班）



土器の実測（2班）

3班

上半期に引き続き、小杉遺跡第 1・2 次（山中町、平成14・15年度調査）の実測と配石カードの作成を行った。土器の実測では文様の見分け方、水平角度などが難しく、改めて縄文土器の奥深さを知った。文様については人によって見方が違っていたので、班内で統一するのに苦労した。カード作成は配石の計測とデジタルカメラでの撮影であったが、初めての作業でカメラの扱い方を始め、試行錯誤しながらの作業だった。特に屋外での作業は、日光の加減で撮影が大変だった。また中には重くて動かせない石もあり、上からの写真を撮るのがやっとで、うまくできないものもあった。（中村静絵）



配石の計測（3班）



土俵の実測（4班）

4班

上半期に着手した四柳白山下遺跡第4次・5次の遺物実測とトレースを行い、1月初旬に作業完了。3月末迄白山室堂遺跡、小松城跡、金沢城跡の三つの遺跡の整理作業を行った。白山室堂遺跡は、土師器の小皿が多く、鉄滓、火打鎌、釘、刀子も数点実測した。小松城跡は、16世紀代の遺物が出土しており、土師器の小皿、初期伊万里、中国青磁、また大きな把手の付いた灯明皿が一点目を引いた。金沢城跡では、二の丸園路、三の丸、新丸から出土した陶磁器と瓦の実測をしたが、完形であればさぞ見事な陶磁器であろうと思われる物が数多くあった。平瓦と漆喰であの微妙なモノトーンの海鼠壁が作られている事に、先人の美意識の高さを感じられる。土嚢として使用された土俵の実測は、表面の摩滅が著しく、編み目の判別に苦労した異色の遺物であった。(新谷由子)

5班

上半期に引き続き、小島西遺跡(七尾市、平成14・15年度調査)の木製品の分類、データ作成、実測、トレース作業を行った。パソコンとデジタルカメラによるデータ作成は、試行錯誤の末、遺物の状態が上半期よりもやや良好であったことも手伝って、かなり効率が上がってきた。しかし、種別によっては、撮影前の接合に思いのほか時間がかかるなど、問題点もいくつか残っている。より多くのデータを残せるように、より一層の創意工夫が必要であろう。(横山そのみ)

6班

金沢城跡県庁跡地(金沢市、平成15年度調査)の分類・接合および土器・石器・木器の実測・トレース作業を行った。土師器、須恵器、瓦器、瓦、中でも染付けが数多くみられ、器種としては皿、急須、湯呑と思われる小椀、火鉢、便所甕などの大型のものもあった。また、染付けの絵柄は、整理課としては新しい試みとなる擦筆で細かく濃淡をつけていった。図面の表現方法の広さと可能性を考えさせられるよい経験になった。

次に、金沢城宮守堀(平成15年度調査)の分類・接合および瓦と石瓦の実測・トレース作業を行った。平瓦、丸瓦、軒瓦、塙瓦と多種にわたる細片の接合は容易ではなかったが、特に塙瓦には完形になるものも多く、海鼠壁としてあった本来の姿を押し量ることができた。(藤崎敬子)



木製品のデジタルデータ作成(5班)



瓦の接合作業(6班)

7班

半年間、大長野 A 遺跡（小松市、平成10・11年度調査）の整理作業を行った。縄文・弥生・古代・中世の遺物が出土していたが、土器は弥生・中世が多かった。クシガキ工具による列点文が施された甕や、内外面八ケ目調整の甕など、実測やトレースに注意を要した。籠痕のある壺も印象的だった。また、石器がパンケースで50箱ほどあり、凝灰岩製品の接合を行った。石器は1点1点チャック付きのビニール袋に入れ、出土地点を明記して、器種や形によって分類した。石鏃・打製石斧・砥石など、方眼のない白いケント紙による製図で、繊細な観察や表現が要求され、眼科のお世話になる班員も出た。石器に関しては整理課泣かせの遺跡だった。（正木直子）



大型陶器の実測（6班）



石器の接合作業（7班）

8班

四柳白山下遺跡（羽咋市、平成11年度調査）のトレースを終え、引き続き観法寺遺跡（金沢市、平成11年度調査）の整理作業に入る。主に古墳時代初頭と古代を中心とするもので、須恵器・土師器・石器・木器・瓦等が出土していた。土師器は磨耗が激しく、思ったほど形にならず、復元に苦労した。墨書が少々出土していたが、判読可能なものは2、3点で、大半は判読不能であった。瓦は、ほとんどが布目の平瓦で、丸瓦が1点見られた、又、緑色凝灰岩の剥片がちらほら出土しており、他には玉砥石・羽釜・磨石類があった。木器は柱根・天板・杭・建築部材を中心とするもので、矢板の中には、大変残りの良いものが見られた。又、「加志波急」と読みとれる木簡が一点出土していたのが、唯一記憶に残る遺跡であった。（馬場正子）

洗浄

下半期は、たくさんの遺跡（20遺跡）の洗浄・乾燥作業を行った。金沢城跡を主として、粟津カンジャバタケ遺跡、北吉田ノシロタ遺跡、正友じんとくじま遺跡、的場農業倉庫前遺跡などである。金沢城跡では、泥のたっぷりついている瓦の入ったパンケースがとても重く、数も多かったので、手や腰が痛くなり大変だった。洗浄の方では、手が荒れぼろぼろになった。手袋をしたりもしたが、すぐに手袋に穴があいた。絆創膏をたくさん使った。私もたくさん使った。瓦の乾燥は、乾きが悪いものもあった。今回は、とても負傷しながら、頑張った。（上尾春代）

復元

下半期は梅田 B 遺跡、大長野 A 遺跡、観法寺遺跡など数遺跡の補強、復元作業を行った。籠痕の付いた壺、縄文の鉢、把手付壺、甕、壺、碗、皿など、形も大きさもいろいろさまざまである。材質も土師器、須恵器などであるが全体的には、土師器の割合の方が多く手がけたと思います。現代ではいろいろな道具があって作っていくことが出来るが、昔の人たちは数少ない道具を使って、文様を付けたたり、すかし穴を作るなど器用にこなしていたものだと思います。これからも昔の人の気持ちを考えながら作業を進めたいと思います。 (前田すみ子)



木柱の実測 (8 班)



木柱の実測 (8 班)

白江梯川遺跡の木製高杯について 資料提示と問題点提起

久田正弘・石川ゆずは

1. はじめに

近年、石川県内では多量の木製品を伴う遺跡の調査例が増加しており、平成14年度調査の小松市白江梯川遺跡でも多くの木製品が出土した。多量の木製品の中には希少性や重要性などから保存処理担当中山主事の企画・編集によって、平成15年3月発行の「石川の遺跡 No.15」に調査概要と装飾高杯などの写真を直ちに紹介した。その後、平成16年3月に大阪府立狭山池博物館長工楽善通氏、鳥取県埋蔵文化財センター高垣陽子氏の資料調査の中で、内面に別木を埋めたような痕跡があるとの有意義なご教示を頂いた。その後、北陸なんでも勉強会での石川ゆずは氏の木製容器についての発表があり、白江梯川遺跡の資料化と発表要旨の一部文章化を石川氏にお願いした。白江梯川遺跡は正式報告書までは時間が掛かることが既に決定していたので、早期の資料化、問題点の提起と共有化が必要と判断し、石川氏に3月に実測をお願いして今回報告することとした。(久田)

2. 調査概要

白江梯川遺跡は、小松市北部にあたる白江町集落の北西側に位置し、弥生時代から中世の集落遺跡である。白江集落付近では梯川は北側（一針集落側）に大きく蛇行していたこと（第1図上）が判っており、白江集落の南西側には木製高杯（第2図2）を出土した白江念仏堂遺跡（第1図2）があり、白江集落から北東約1.5kmには古墳時代前期の木製高杯（第2図4）を出土した千代・能美遺跡（第1図3）がある。白江梯川遺跡平成14年度調査区（第1図下）では2面の調査を行った。上層では中世～近世の溝など、下層では古代～近世の杭列や溝などと弥生時代後期の包含層と川跡（第2図）を検出した。調査区の東側で川跡の東岸を検出したが、60m以内では西岸は検出されなかった。川跡はほぼ北東から南西に流れており、川岸は中央部から南側は急激に落ち込んでいたが、北側は砂の堆積によってなだらかであった。川岸の斜面と本流部との境には、自然木（広葉樹）や建物の柱などを転用した杭が何本も打ち込まれており、杭と岸の間に多量の木製品が何層にも折り重なって出土した。土器は6箱程度であるが、弥生時代後期前半～後半が主体であり、中期末と後期末の土器が若干出土した。木製品は大きく、建物関係、船関係、祭祀関係、生活関係などに分類できる。木製高杯は調査区北壁断面の実測図にある板材の下から出土（第2図）し、標高は0.33mである。(久田)

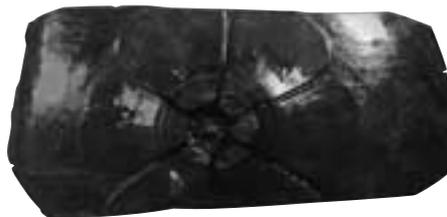
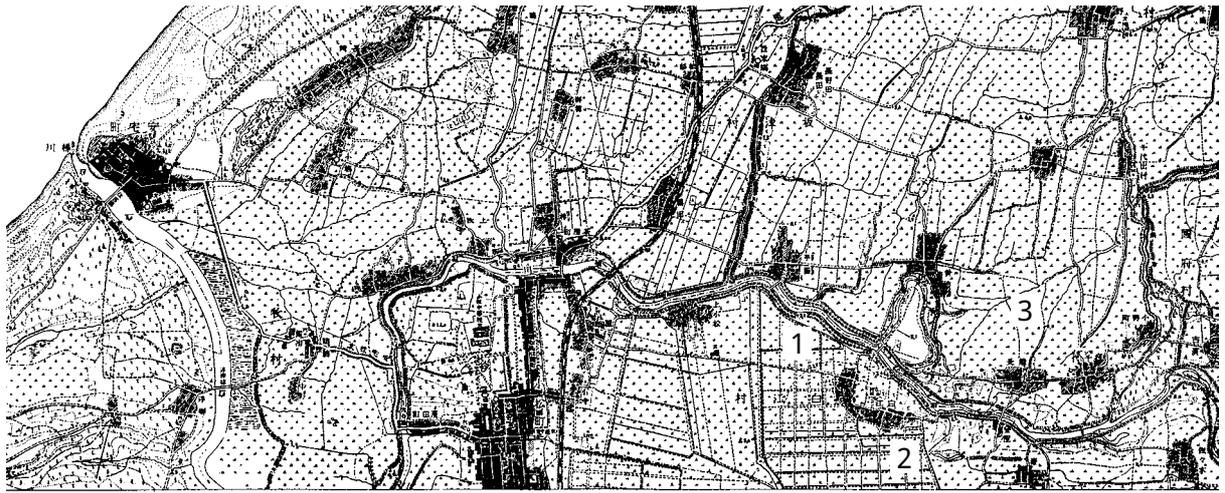
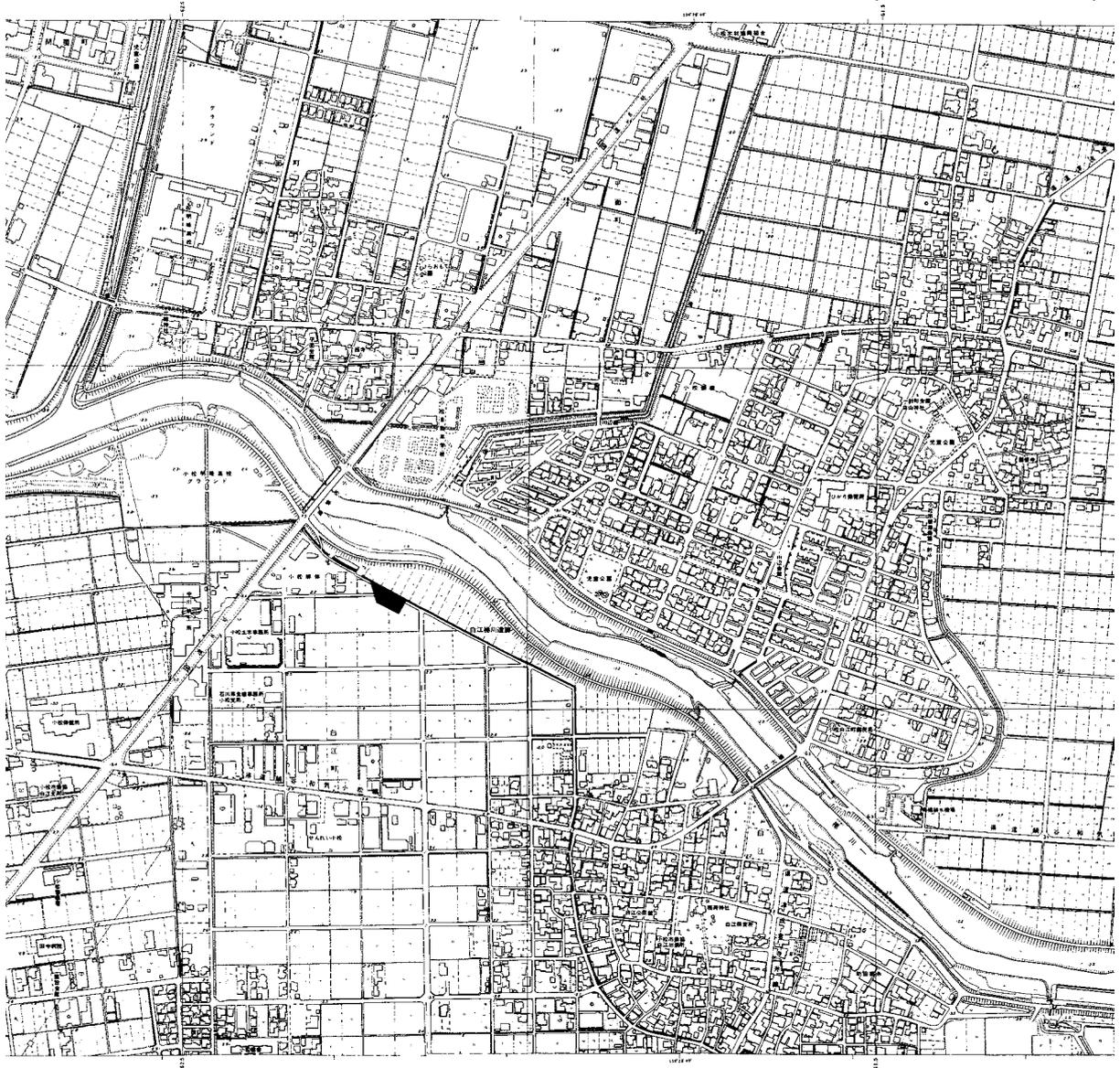


写真1 白江梯川遺跡出土の精製高杯（外面）



(明治42年、1 / 40 ,000)

(平成2年、1 / 10 ,000)

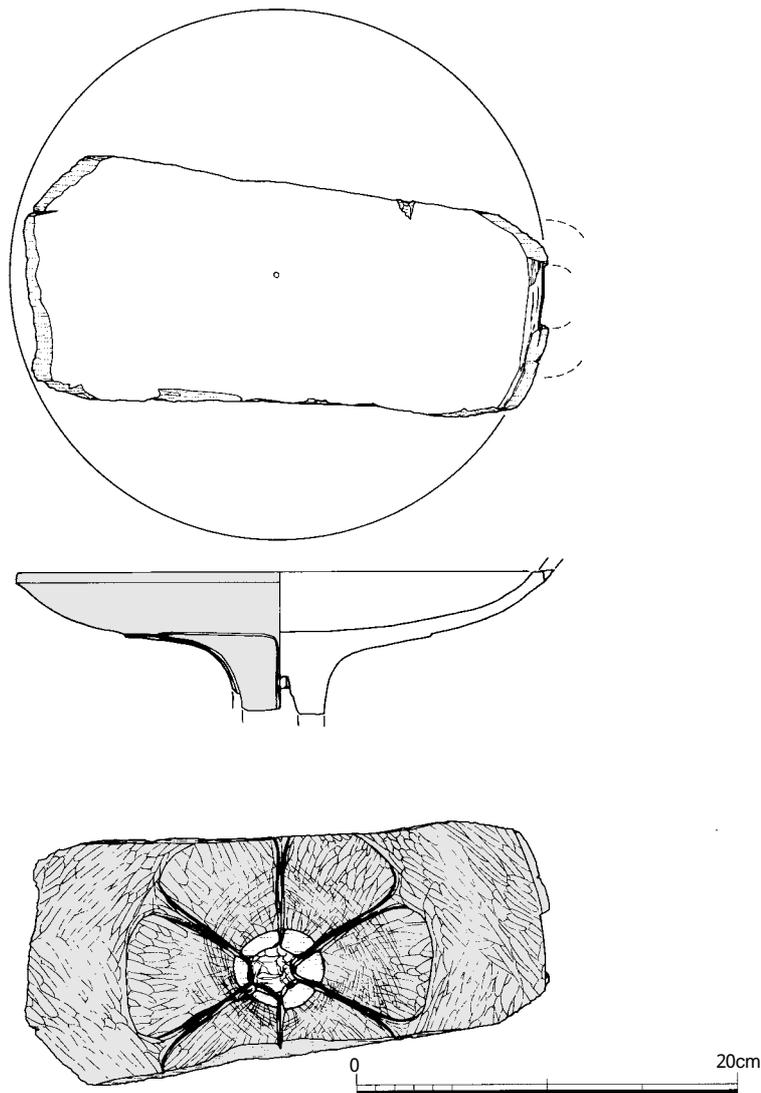


第1図 周辺の地形

3. 精製高杯について

白江梯川遺跡から出土した木製高杯（第3図）は、成形・文様などの精巧さなどから、いわゆる精製高杯と呼ばれるものである。法量は現状で、長軸27.8cm、短軸13.6cm、高さは7.5cmである。杯部の厚さは、約7mm、柱状部径4.6cm、花卉文様径は16.0cmである。一部口縁部が残存しており^{註1}、口縁部の推定径は27.4cmである。外面には赤彩（水銀朱）が全面に施されており、内面には一部痕跡が認められる。横木取りで、樹種はクワ属（ヤマグワ^{註2}）である。側面観は、口縁部から外面文様部分までは丸みを帯び、文様部分から柱状部付け根にかけては、比較的平坦につくられている。柱状部は杯部の6個の花卉文様から伸びる、断面隅円台形、三角形の集合帯で形成される。柱状部の内部は、粗く割り抜かれており、杯部中央の厚さは2.5cmである。外面全域には約5mm幅の加工痕がみられ、花卉文様以外の範囲は材を回しながら数回に分けて加工している。花卉文様周囲の加工は、材と直行方向から切り込みをいれ、その後、文様周囲口縁側から少し深めに削り文様の輪郭をつくり出している。文様上面にも一定方向からの加工痕が認められる。脚部から杯部文様上面にかけては、仕上げ時に施したと思われる時計回りのミガキ痕跡が認められる。内面には明瞭な加工痕は認められないが、ほぼ中心に当たる部分に径3mmの黒色部分があり、製作技術に関する重要な痕跡と思われる。

（石川）



第3図 白江梯川遺跡出土の精製高杯（S = 1 : 4）

この痕跡は、石川県埋蔵文化財センターにおいて横からのX線写真撮影を行ったが、X線写真では明瞭な痕跡が確認されなかったので、あまり深くはないようである。よって、径3mmの小円痕（写真3中央右寄り）は杯内側からの孔であるが、別木などを埋め込んだものではなく、おが屑などを漆で溶いたものを埋め込んだ痕跡であろうか。（久田）

4．精製高杯の展開

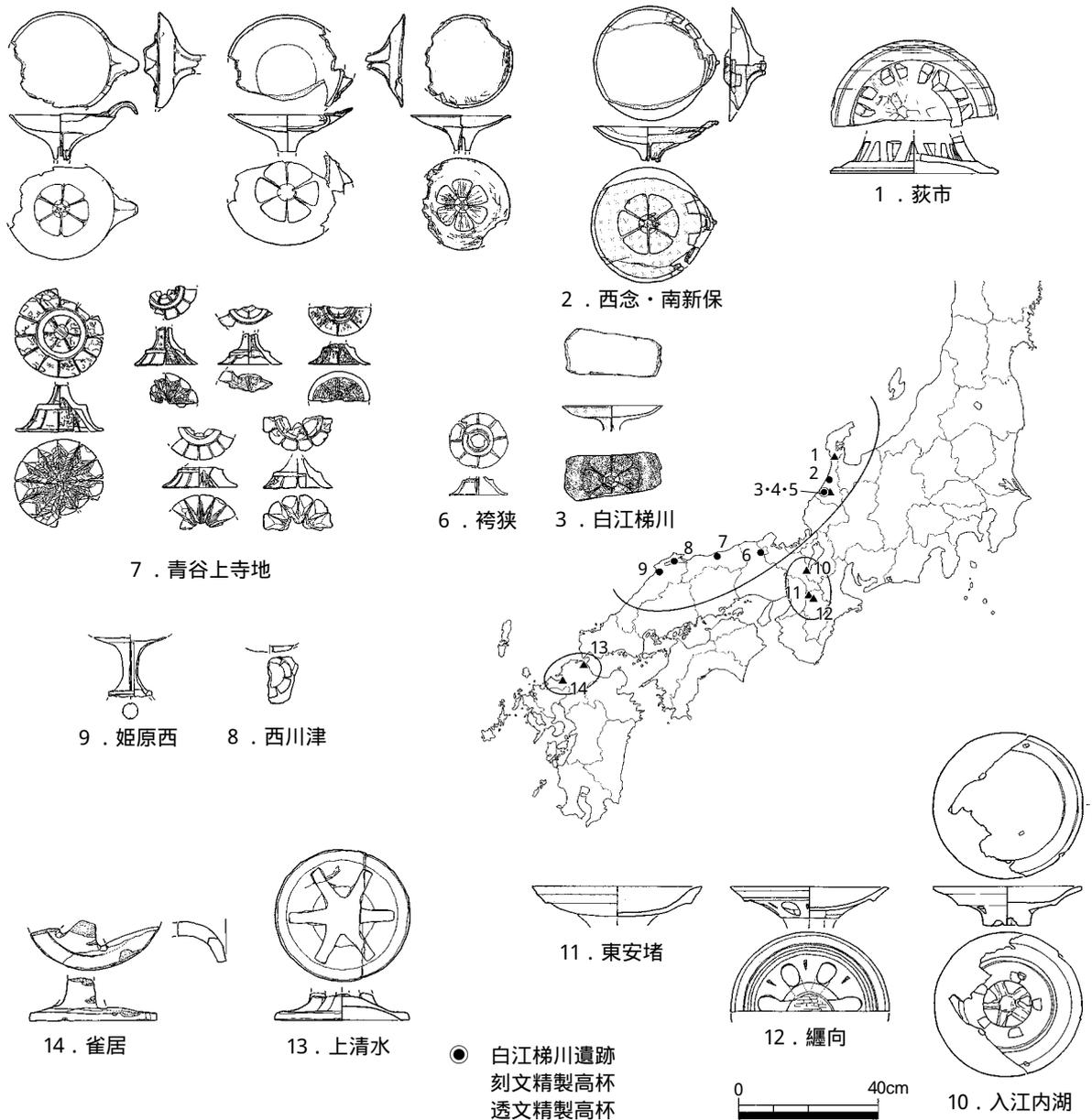
ここでは木製の精製高杯について全国の類例からその時期と分布などを検討してみたい。精製高杯は、全国14遺跡で出土（第4図）しているが、点数をみると、その半数以上が鳥取県青谷上寺地遺跡からの出土である^{註33}。時期は、概して弥生時代後期～古墳時代前期である。遺跡分布をみると、北陸地方と山陰地方に集中しており、日本海分布圏が見てとれる。また、近畿・北部九州地方にも数例みられる。

精製高杯は、その施文技術と樹種の差異から2つに分類できる。1つは、北陸・山陰地方にみられる、花卉文様を杯部外面に陽刻^{註34}する広葉樹製のもの（刻文精製高杯）である。もう1つは、近畿・北部九州地方などにみられる、透かし孔を穿つ針葉樹製のもの（透文精製高杯）である。九州地方では、弥生時代中期から脚部に透かし孔を持つ容器が多く出土する傾向があり、北部九州地方の精製高杯はそれらの系譜を引くものとも考えられ、弥生時代後期に出現する他地域の精製高杯とは少し系譜が異なる可能性がある^{註35}。このように精製高杯には2つのタイプがあり、その施文技術は樹種と深く関係している。つまり、割裂性の高い針葉樹（スギ）は透かし孔をあけるのに適し、陽刻などの彫刻には堅く、割裂性の低い材（ヤマグワ・ケヤキ）が使用されていたと考えられる。そして、北陸地方ではその両方のタイプが出土しており、樹種の選定が形態を決定していたと伺えるのである。近畿地方では、透文精製高杯がみられるが、弥生時代後期以前に木製容器に透かしを穿つ系譜はこの地域には見られず、突然現れたと考えるよりも、他地域から搬入されたと考えた方が自然であろうと思われる。精製高杯は言うまでもなく、非日常的場において使用される器であり、その製作技術は高度で、ある程度広範囲を占拠する専門集団の存在を想定する必要がある。（石川）

5．問題点の整理

今回紹介した精製高杯と呼ばれているものは、轆轤の使用の有無についての議論がなされている渦中のものである。考古学的に木工用轆轤使用の可能性を初めて記したのは小林行雄である。小林は『大和唐古弥生式遺跡の研究』において、弥生Ⅰ期から轆轤の使用を想定しており、その具体例として、第Ⅳ期出土の水平縁高杯を挙げている^{註36}。その後、登呂遺跡や山木遺跡を調査した後藤守一は、唐古遺跡より一段階新しい時期での轆轤使用の痕跡が認められなかったことから、轆轤の存在を疑問視した^{註37}。1980年、石川県西念・南新保遺跡から今回紹介した精製高杯が出土し、轆轤目の痕跡を確認したと報告された^{註38}。その後、成田寿一郎によって、その轆轤目の検証がなされ同心円をなしていない点で、轆轤目ではなく仕上げ時の痕跡であるとして、轆轤使用を否定した^{註39}。対して、CTスキャンや製作実験による分析を行った工業普通は、回転体で器壁の厚さが一定しているという点から轆轤による成形であろうとしている^{註40}。その後、轆轤についての議論にほとんど進展はなく、「弥生時代に轆轤技術があったとしても、木製容器の基本は、削物であった」^{註41}として、その問題を深く追求することは避けられているのが現状である。

今回の精製高杯においても、外面の加工痕を見る限り轆轤使用の痕跡を明らかにすることはできなかった。しかし、内面の中央にみられる小円の痕跡は、轆轤と何らかの関係があるものと考えられる。



● 白江梯川遺跡
 刻文精製高杯
 透文精製高杯

No.	分類	遺跡名	所在地	遺構・層位	備考	時期	樹種
1		菟市	石川県宝達志水町	下層大溝	脚部?	弥生後期~古墳初頭	イチイ科カヤ
2		西念・南新保	石川県金沢市		杯部 / 赤彩	弥生後期~古墳初頭	ケヤキ
3		白江梯川	石川県小松市	SX01	杯部 / 赤彩	弥生後期	クワ属(ヤマグワ)
4		白江念仏堂	石川県小松市		杯部・脚部 / 赤彩	弥生後期~古墳初頭	
5		千代・能美	石川県小松市	川跡	杯部	古墳前期	
6		袴狭	兵庫県豊岡市	第2遺構面ベース層	杯部	弥生後期~古墳	針葉樹
7		青谷上寺地	鳥取県青谷町	4区・SD11	杯部	弥生後期~古墳初頭	ヤマグワ
				1区・SD11	杯部 / 赤彩	弥生後期~古墳初頭	ヤマグワ
				4区・SD38-2	杯部 / 赤彩	弥生後期~古墳初頭	ヤマグワ
				4区・SD38-2	脚部 / 赤彩	弥生後期~古墳初頭	ヤマグワ
				4区・SD11	脚部 / 赤彩	弥生後期~古墳初頭	ヤマグワ
				1区・SD11	脚部 / 赤彩	弥生後期~古墳初頭	ヤマグワ
				4区・SD11	脚部 / 赤彩	弥生後期~古墳初頭	カヤ
				8区・SD54	脚部 / 赤彩	弥生後期~古墳初頭	
				8区・SD38	脚部 / 赤彩	弥生後期~古墳初頭	
8		西川津	鳥根県松江市	区・砂礫層2	杯部	弥生後期	
9		姫原西	鳥根県出雲市	B・BW区10a層	杯部下位~脚部上位	弥生後期	
10		入江内湖	滋賀県米原町	第層(包含層)	杯部 / 赤彩	古墳前期	ケヤキ
11		東安堵	奈良県安堵町	- 区間・落込み	杯部 / 赤彩	弥生後期~古墳初頭	
12		纏向	奈良県桜井市	辻地区・土坑4	杯部 / 赤彩	弥生後期~古墳初頭	ケヤキ
13		上清水	福岡県北九州市	8層最下層	脚部	弥生後期~古墳初頭	スギ
14		雀居	福岡県福岡市	5次 SD221	脚部	弥生後期	

第4図 精製高杯の分布

もし、轆轤使用によるものとする、工楽氏のいうとおり、一定程度轆轤で成形した後、器壁・文様部分を工具で整形して製作されたと考えられる。

今回は、資料の紹介を急いだため、他の資料を実見していない。今後、これまで出土している精製高杯や、同心円を呈する木製品についても同じような痕跡の有無を確認する必要があり、課題とした。また、透文高杯における専門性と製作地域の限定に関して、検証していきたいと考えている。

(石川)

6. おわりに

白江梯川遺跡の小円の痕跡は、工楽氏が最初に認識されたものである。また工楽氏からは、西念・南新保遺跡出土例にも小円が認められるが、青谷上寺地遺跡では認められないとのご教示を得た。今年3月に文献調査を行ったところ、島根県西川津遺跡出土例(第2図5、樹種不明)にも小円の痕跡が報告されているのを知った。「底部のほぼ中心となる位置には、小さな孔をもつ」とあり、孔の大きさや穿孔方向などの詳細は不明であるが轆轤使用の痕跡である可能性が高いと思われる。白江梯川遺跡の高杯は、肉眼ではケヤキに見えるが、分析ではクワ属(ヤマグワ)であり、樹種では山陰地方との共通性がある。また轆轤使用の可能性があり、今までは北陸地方の特性とされていた轆轤使用の可能性が、西川津遺跡例から山陰地方でも高まったものと思われる。

精製高杯などは「製品の移動・製作者の移動・デザインの移動」について、時期・樹種・轆轤などの問題とからめて多くの方々が論じられており、おりしも今年『木製容器・かご』『王権と木製威信具』が刊行された。石川ゆずは氏には富山県文化振興財団囑託だった3月には日曜日に実測して頂き、奈良県田原本町教育委員会囑託の現在では忙しい中での原稿を頂き、感謝しております。今回は資料の紹介を兼ねて石川氏による資料紹介と問題提起を行ったものである。この問題提起により、各方面からの多くのご教示・批判を得て、白江梯川遺跡出土木製品のより良い整理・報告書作成に臨んでいきたい。

(久田)

註1 口縁部の残存している部分は、類例から把手状の耳(飾り耳)に穿たれている透孔の一辺と考えられる。

註2 (株)パレオ・ラボ 三村昌史氏の分析報告による。

註3 青谷上寺地遺跡では、口縁部に付く飾り耳の破片なども含めると、約50点程の精製高杯が出土している。(鳥取県埋蔵文化財センター 2005 『木製容器・かご』青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告1)

註4 青谷上寺地遺跡では、花卉文様を陽刻ではなく陰刻しているものが1点出土している。

註5 九州地方では、装飾的な透孔をもつ高杯や台付鉢が他の地域より多く、盤の脚部(双脚)に長方形透かし孔をもつものも分布している。(石川ゆずは 2005 「弥生時代中期~古墳時代前期にかけての木製容器」『富山考古学研究 紀要第8号』富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所)

註6 小林行雄・末永雅雄・藤岡謙二郎 1943 『大和唐古弥生式遺跡の研究』

註7 日本考古学協会 1954 『登呂』本篇

註8 宮本哲郎 1981 「日常生活の道具 - 西念・南新保遺跡出土木製品」『月刊文化財』218

註9 成田寿一郎 1984 『木の匠 - 木工の技術史』

註10 工楽善通 1989 「木製高杯の復元」『古代史復元5』

註11 上原真人 1994 「入れもの」『季刊考古学 第47号』

上原真人 1996 「木製容器の種類と画期」『古代の木製食器』第39回埋蔵文化財研究集会

参考文献

- ・石川県埋蔵文化財センター 2003 「石川の遺跡 No. 15」
- ・石川県埋蔵文化財センター 2003 『石川県埋蔵文化財情報誌 第10号』
- ・石川県埋蔵文化財保存協会 1998 『萩市遺跡』
- ・石川県立埋蔵文化財センター 1982 『漆町遺跡』
- ・金沢市教育委員会 1983 『西念・南新保遺跡』
- ・北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1995 『上清水遺跡Ⅲ区』
- ・桜井市教育委員会 1986 『纏向』
- ・滋賀県立安土城考古博物館 2005 『王権と木製威信具』平成17年度春季特別展示図録
- ・島根県教育委員会 1999 『姫原西遺跡』
- ・島根県教育委員会 2003 『西川津遺跡Ⅸ』
- ・鳥取県教育文化財団 2001 『青谷上寺地遺跡3』
- ・鳥取県教育文化財団 2002 『青谷上寺地遺跡4』
- ・鳥取県埋蔵文化財センター 2005 『木製容器・かご』青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告1
- ・奈良県橿原考古学研究所編 1983 『東安堵遺跡』
- ・兵庫県教育委員会 2000 『袴狭遺跡』
- ・埋蔵文化財研究会 1996 『古代の木製食器』第39回埋蔵文化財研究集会
- ・米原町教育委員会 1988 『入江内湖遺跡（行司町地区）発掘調査報告書』



写真2 白江梯川遺跡出土の精製高杯（内面）



写真3 内面中央部拡大写真

石盤考

松尾 実

はじめに

石川県下で発掘された資料として石盤を報告されている例は増加しているが、その実態と地域史的な評価を行うにあたり、考古学的に十分に活かされているとはいえない状況である。日本の場合、石盤は近代（明治～大正）での尋常小学校低学年の教具^(注1)としてアメリカから輸入されたのがその端緒とされ、その後に学校設立が各地で爆発的に増加するに伴い、国産化されて国内に広く普及した。しかし、新たに鉛筆などの国産化によって消滅した短命の代物といえる。視点をかえて文具史から見ると毛筆、硯、和紙等から鉛筆、ノート（洋紙）、消しゴムに移り変わる際の過渡的な時期に存在する。さらに、以下で検討する教育史、産業史等にも関連しており、特に明治～大正にわたる近代国家形成過程での社会状況を窺う考古資料の一つとして認められる。このように、該期における地域史的な社会様相を考古学的にもアプローチでき、多くの示唆が得られることが可能であると考えられる。

本稿では、まず石盤についての報告を行い、石川県下での集成と若干の検討からその存在意義について評価を行いたい。

1. 石盤とは

石盤とは、粘板岩などの堆積岩を本体部として長方形に薄く加工し、その4辺を組み合わせた木製枠にはめ込んだ教具である。実際には石盤、石筆（蠟石を加工したもの）、石盤ふき（布）を1セットとして習字、算術などの学習の際に使用されていた。なお、呼称については、近年「石板」で報告

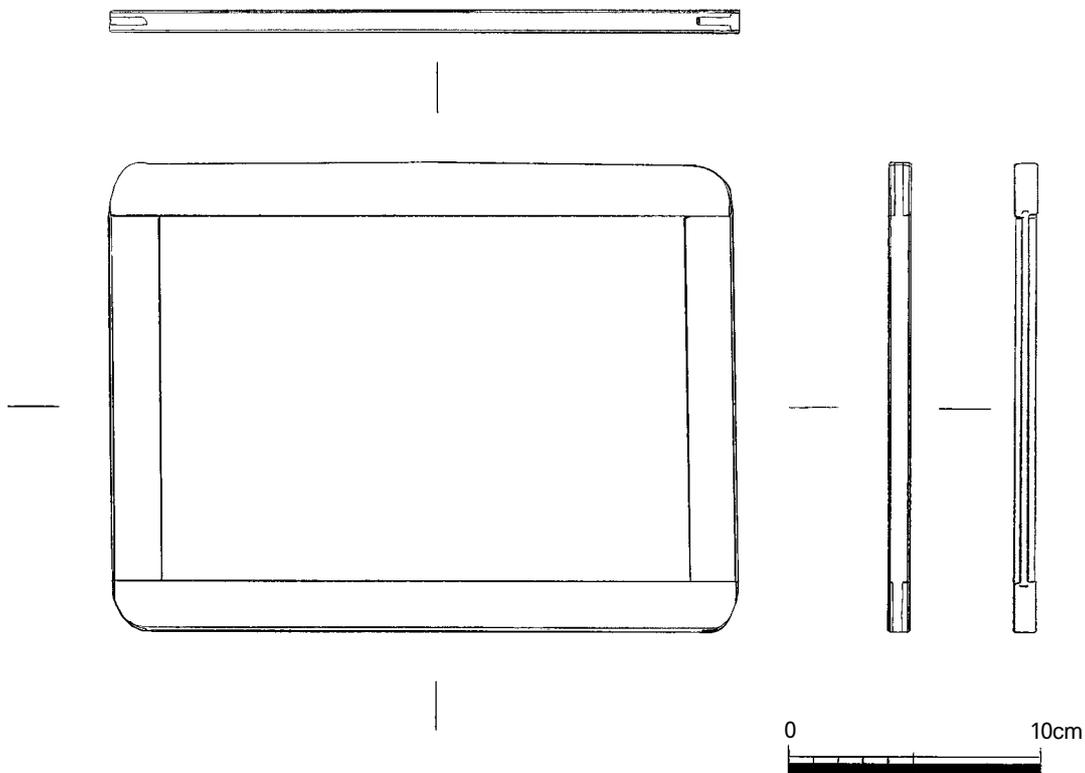


図1 石盤実測図

されている例が多いが、本稿では「石盤」の語を用いる^(注2)。なぜならば、火力で熱して使用する石製調理具や印刷版等の混同を避けるためと、明治期の学校教材名や物品名で常用されていたからである。

以下では、石盤の説明を行う。発掘調査で出土した資料は、破片がほとんどである。全体像が不明であるため、石川県立歴史博物館に所蔵されている完形の石盤資料^(注3)を例にとって検討を行う。

石盤の本体部である石材は黒色の粘板岩 (slate)^(注4)と考えられ、本体の4辺には木枠がついている。表面には柾目が見える。材は杉と考える。木枠をはめ込んだ石盤の大きさは、縦18.7cm、横24.8cmの長方形となる。江戸時代からの度量衡(1寸=約3.1cm)で換算すると、縦6寸、横8寸となる^(注5)。国産化された石盤と考える。また、規格品であると考え、大量生産を行っていたと推測する。商品としては、本体部に木枠を取り付けたものを石盤として広く販売・流通していたと考える^(注6)。本資料の本体側縁部の観察はできなかったが、類例^(注7)から、本体部の規格は、縦15cm(約5寸)、横22.3cm(約7寸)での長方形となる。表裏の4辺には約0.5cmの幅で砥がれて厚さが薄くなる。つまり、本体部の厚さがほぼ0.3cmに対し、側縁部は0.2cmとなる。木枠を取り付けやすいためだと考える。さらに、側面には斜位の線条痕が見られる。これは切り出し、又は裁断時における痕跡と考えられるが、そのまま砥いで平坦にしないているのは、木枠を取り付けやすくする工人の合理的な石工技術といえよう^(注8)。

木枠の4隅は丸く加工し、組み合わせる細工を施しており、使用時の配慮を窺わせる工夫といえよう。なお、木枠は容易に取り外しさせないようにするため、4隅の組み合わせ部を接着剤等で補強したと考えられる。ちなみに、この形態を石盤A類とする。石盤B類は、4隅の組み合わせ部分に径約0.2cmの穿孔を行い、竹などを差込み、木枠の部品が分解しない工夫を凝らしている形態とする^(注9)。

石盤の製作工程としては、鉱山からの切り出し、屋内工場における裁断・本体部の規格の加工、細加工(砥ぎ調整)で、別工場において木枠を取り付けと検品、商品として何体かをセットにして梱包し、出荷したと想定するが、具体的にどの商店が関与していたかなどは不明である^(注10)。ちなみに、後に廉価な紙製石盤が出回るが、最初に東京麻生の古川堂が商標登録を取得し、販売しているが、石盤も商標登録がされていたのかは証左がないため、不明である。

最後に、本資料は実際に使用されていたようであり、横方向の擦痕が多数見られる。しかも、擦痕の多くは左端が深く、右端にいくに従って浅くなる。両面のうち片方の使用頻度が大きく違い、表、裏として認識がされていたことも窺える。色調も異なり、頻度の高い方はやや白い。蠟石などによるものか。石盤には文字、数字などを書き込むための石筆、それらを消す布が必要とされる。よって、



写真1 石盤(A類)

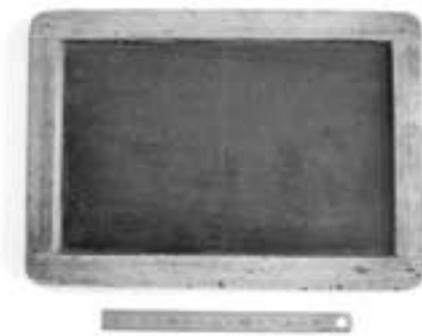


写真2 石盤(B類)

石盤本体に多くある擦痕はこれらに関係した痕跡であると推定する。使用痕跡としては、他に格子状に線刻したのが見られるのが少なくない。石盤は両面が使用可能であり、両面に使用痕跡が認められるものがあり、片面のみの使用は行っていない。

2. 石川県下における石盤出土遺跡の集成と若干の考察

管見ではあるが、本章では石川県下で出土した遺跡の集成作業を行った。近代頃の遺物を報告している例は多くなく、また限られているので、石盤とセットとされる石筆も加えて報告する。

遺跡から石盤が出土する傾向としては、包含層が多いが、土坑から土器とともに出土している例もある。遺構から出土している町中の遺跡では、圃場整備などの土地改変が農村ほど進んでいないため、良好に残存していたと考える。

石盤については破片が多く、黒色粘板岩がほとんどである。現在のところ、石材は粘板岩に限定されている記述^(注11)と符合する。しかし、その生産地が宮城県桃生郡雄勝浜産^{ものう}と断定するには、慎重な姿勢をとる必要がある。ただし、私見ではその可能性は高いと考える^(注12)。

また、清金アガトウ遺跡、九谷A遺跡では、側縁部に沿って0.5cmほど、砥ぎ調整をし、その側縁端面には斜位の線条痕が認められる資料が見られる。広坂遺跡出土資料で観察した痕跡と酷似しており、汎的に認められる。石材の切り出し時の痕跡ならば、生産地が同じである可能性が高く、また工場内における裁断時の痕跡ならば、同一製作場での可能性が高いことを示唆する。製作工程今後、側縁端面の線条痕の記録も発掘資料として報告する必要があることを提言したい。

醒ヶ井遺跡では格子状の線刻が認められ、使用していたことが窺える。この格子状の線刻は、習字、計算などに際してつけられたものと考えられるが、その使用方法の具体的な内容は不明である。

石盤が出土した付近には、明治期に設立された学校が付近にある傾向を示すことを指摘する。ただし、江戸時代から町を形成していた人口密度が高い地域よりも、比較的低い農村において妥当性が認められるかもしれない。つまり、町では富裕層の密度が高いため、個人の所有量が農村よりも多かったと考える。出土地についても、町では学校から離れたところにあるため、個人が保有していた可能性が高く、一方の農村では学校所在地付近から出土していることから首肯されよう。

一方の石筆は、石材が蠟石であると認められる。色調などは多様で、白色系、茶色系、灰色系などがあるが、白色系が多い。遺物の完形資料はないが、直径は0.5～6cmの範疇に収まる。断面形状は、円形が多く(A類)、六角形などの面取りを行っているもの(B類)、かまぼこ型(C類)などがある。石筆の消費量は2日に1本ほどであったとされ、その消費量は多かったと考えられる。これらは販売元、製作場の違いと考える。

先端を現在の鉛筆のように尖らせて使用しており、片側や両側を削っており、現在の鉛筆と同じような使用方法であったことがその現象から推定できる。

製作工程としては、鉾山からの切り出し、屋内工場での裁断・規格の加工を行い、検品して、何本かをセットにして梱包して出荷したと想定する。

3. 石盤について

石盤は、元治元年(1864年)に横浜へ輸入されたのが最初とされる。その使い道は学校教育に利用されてきた。明治政府は集団教育、開発主義によるアメリカの授業形態を採用し、その教材器具を輸入した。その後、明治3・4年からは輸入量は増え、明治9年にはさらに増大したようである。明治5年に文部省は「小学教則」で石盤について触れており、実際の教育現場で「綴字」^{カナツカヒ}を学習する際に石盤を用いることを示している。石川県金沢区では、明治6年に貧民子弟のための教育機関として「共立小学社」が設置され、そのもとに夜学の「仁恵学校」が設立された。その趣旨と規則^(注13)のな

かには石盤の記述があることから少なくとも金沢区の学校に石盤が普及していた可能性を示唆する。同年には宮城県桃生郡雄勝浜で石盤鉱石が発見され、東京府の築地で石盤製造販売会社が国産化を開始した。一方、静岡県安部郡中野村でも国産石盤が発売されたようである。つまり、この頃から国産化された石盤が流通されたといえる。石盤の普及に従い、様々な問題点^(注14)が浮かび上がり、明治20年後半には衛生面などから石盤廃止の提案がなされ、明治32年には大阪府師範学校付属小学校が石盤の使用を廃止し、練習帳と鉛筆を用いることを規定した。明治34年には、真崎鉛筆（現三菱鉛筆）が本格的な国産鉛筆として製造販売を行い、また国産洋紙の普及に伴い、明治40年頃には石盤は衰退していった。ただし、この事象については地方において必ずしも当てはまるというものでないことを付言しておく。石盤が主に普及していたのは明治10年～40年頃と推定できる。

では、どの年齢が使用していたのか。尋常小学校や女学校などがあげられるが、主に初等普通教育期間の満6歳～10歳の中でも最初の2年間ほどであったようである。また、教材を使用した授業はどのようなものがあったのか。多くは「習字」、「書取」、「算術」などである。なかでも「習字」、「書取」ではあらかじめ石盤に文字枠の縦横線を引かせる記述があり、本報告における石盤集成のなかにも格子状に線刻しているものはその際の痕跡の可能性がある。「算術」については、数字を覚える際と筆算を実行させる際に使用したようである。他にも「地理」、「物課」（物の名称について学習する学科）などにも利用されていた。このように、文字や数字を幾度と書き込む役割を担っていたことがわかる。

価格については、国産化されたといえ高価であったようで、明治31年頃でさえ1枚8銭であったとされる。代用品も多く発明され、明治7年頃に発売された紙製石盤は石盤を補う形で普及している。（価格が3枚折り2銭、6枚折り4銭）他に、木箱などに砂をいれたもの（砂盆）、木製石盤（木盤）、瓦盤などがあったようである。先述で検討した石盤出土の傾向を考えると、尋常小学校などにあることは、石盤は各個人すべてが保有していたとは考えがたい。経済的に恵まれている生徒は個人が所有していたであろうが、そうでない生徒は代用品を所有していたか学校側が購入し、貸与もしくは給与という形で使用していた場合もある。

それでは、見方を変えて、石盤を産業製品としてみると、どのような知見が得られるのか。本体部は粘板岩である。これらは石盤を国産化する際に調査した結果、良質な石材が採取できる報告を受けての国産化に踏み切ったとされる。同質の石材を利用した産業製品としては天然スレート瓦があり、近代建築の屋根材に使用された。この製品も規格にそった石材の切り出し、屋内工場における裁断・加工、搬送などといった一連の製作工程は計画的な生産ラインに沿って製作されており、石盤との共通点が多く、関係性を示唆する。主な生産地としては、宮城県や岐阜県などが挙げられる。これらは、国が主導に行った殖産興業政策の一環の事象として捉えられるかと思う。

石材の採掘に際しては宮城県桃生郡雄勝浜付近に東京集治監とともに日本で最初に設立された宮城集治監があり、そこには政治犯が多く収容され、労働力となって使役していたとされる。

また、本体部の生産場と木製枠の製作場は、まず、木材の木取り、加工を行う製作工程を経ると考えるが、本体部の製作場と隣接したところでその工場があったとは考えにくく、設計図をもとに他で製作されていたものとする。また、本体部と木製枠を組み合わせる工場があり、そこで、商品として組み合わせて商品を管理する組織が販売して各地域に流通したと想定する。

折しも、当時の鉄道建設ラッシュや汽船運行の活発化によって、地方から東京、その逆の運送・運輸などの流通の発達によって、人・商品の流動化が激しくなった事象と学制頒布による学校設立の急増とに石盤が地方にまで進出したことは、無関係でないと考える。

4. まとめ

このように石盤を対象に検討すると、発掘調査で出土した石盤の付近には、明治期の尋常小学校があった可能性があることを指摘する。また、学校教材として主に明治10年～40年頃まで利用されたと考えられ、学校の設立・存続時期との関連でより具体的に時期などが判明できる可能性がある^(注15)。

そして、石盤、石筆は、文具史、教育史、産業史といった多分野の一端に係わることが認められた。ひいては、明治期の文明開化、西洋化、殖産興業などといった往時の社会の変化と関係することを指摘する。

発掘調査などで出土した場合、土地利用の変遷を提示することが多いが、たとえ近代といっても、その地域での学校という存在は近隣の住民にとって無視できないといえよう。

おわりに

石盤は明治期の社会を反映した産物の一つで歴史的意義があり、地域史的な評価を与える時にも重要であることを提言したいと考えた。また、将来このような時期の資料でも共有財産として認識して未来に残したいと考えたのである。

以上のような思惑とはうらはらに、資料の不徹底と不十分な検討のために、突き詰めて言及できなかった点も多くあり、理解しづらいところが多々あったと思われるが、ご了承いただきたい。

最後になりましたが、本稿を起すにあたり以下の機関、各位にご教示、ご協力頂いた。氏名を記して感謝の意としたい。

石川県立歴史博物館 (財)金沢市埋蔵文化財センター 岐阜県垂井町タルイピアセンター
伊藤さやか 織田亜希子 垣内光次郎 楠 正勝 西田昌弘 本康宏史 長田貴誉子

[補注]

注1 添田晴雄 1992 「筆記用具の変遷と学習」石附 実編 『近代日本の学校文化誌』 思文閣出版
新村 出編 2004 「広辞苑」 第5版 岩波書店

注2 石盤の「盤」は、たらい・台・皿・鉢・碁盤・将棋盤などの意味合いで用いられる。輸入されてきた物に対して、当初、台や皿などを連想したから「盤」をもちいた可能性がある。垣内光次郎氏のご教示をいただいた。大正時代に発行された辞書を紐解くと、「石盤」は薄い板と説明するものが多いが、その語源の記述に関して明確な文献は発見では見当たらなかった。今後の課題としたい。

注3 本資料の実見に際して、石川県立歴史博物館学芸員の本康宏史氏に便宜を図っていただいた上に多くのご教示、ご協力いただいた。なお、写真掲載は許可をいただいている。

注4 本資料における石材の認定は、地質学、岩石学などの科学的な測定基準に則って判断するのが適切であるが、管見ながら著者の経験的な判断で石材の認定を黒色粘板岩とする。

注5 日本では明治19年にメートル条約に加盟したが、国内での商品規格は従来の度量衡を採用していたようである。ちなみに、大正14年にメートル法を採用した教科書「尋常小学算術」の使用が開始されているが、この頃には、鉛筆、ノート、消しゴムなどにとって変わられて、石盤の姿はほとんど見るものがなくなったと予想される。新村 出編 2004 「広辞苑」 第5版 岩波書店 石附 実編 1992 『近代日本の学校文化誌』 思文閣出版

注6 本センター垣内光次郎氏より「石盤は木枠がついて製品といえる。」との示唆をいただいた。

注7 金沢市埋蔵文化財センターの楠正勝氏には、資料の実見に際して便宜を図っていただいた。また、未報告の金沢市広坂遺跡出土資料の実見をさせていただいた。なお、本稿の記載については、許可をいただいた。

注8 本センター垣内光次郎氏のご教示をいただいた。

注9 岐阜県垂井町タルイピアセンターの長田貴誉子氏には、資料の実見に際して便宜を図っていただいた。これらの類型化では、それが販売元・製作地の違い、時期差なのかという問題は今回の検討では解答できないため、今後の課題としたい。

注10 同注7

注11 石井研堂 1926 『明治事物起原』 春陽堂 石井研堂 1944 増補改訂『明治事物起原』下巻 春陽堂

注12 東京都霞ヶ関所在の法務省館内で建築物の屋根材に使用されていた天然スレート瓦が展示してあり、実見した。石盤の本体部の粘板岩と同質であると考え。

注13 「貧生給与品ノ内硯石盤草紙八、入学ノ時一度二限り、再度給与セズ」。金沢市史編さん委員会 2003 『金沢市史』資料編15 金沢市

注14 高価などの経済面、石筆の白い粉による眼病、字などを消す時に唾で消すなどの衛生面、記録性の乏しさなどの教育面があげられる。

注15 長野県松本市所在の重要文化財旧開智学校では、昭和5～6年頃まで使われていたとされる。地方では、そのように長い間使用されていたと考えられ、石川県下でもその可能性はある。今後の検討課題としたい。

[引用・参考文献]

石井研堂 1926 『明治事物起原』 春陽堂

石井研堂 1944 増補改訂『明治事物起原』下巻 春陽堂

富奥郷土史編纂会 1975 『富奥郷土史』 富奥農業協同組合・富奥公民館

安丸良夫 1995 朝日新聞社 『監獄の誕生』 「朝日百科 日本の歴史別冊 歴史を読みなおす」22

重要文化財旧開智学校管理事務所 1990 『重要文化財旧開智学校 展示解説図録』

海野福寿 1992 『日清・日露戦争』 「日本の歴史」 集英社

石附 実編 1992 『近代日本の学校文化誌』 思文閣出版

季刊考古学 第72号 2000 『近・現代の考古学』 雄山閣出版

タリイピアセンター 1995 『ふるさとの学校展』第5回企画展 タリイピアセンター・歴史民俗資料館

タリイピアセンター 1996 『タリイピアセンター歴史民俗資料館報』No. 2

五十嵐彰・阪本宏児 1996 『近現代考古学の現状と課題 - 「新しい時代」の考古学をめぐる - 』 考古学研究第43巻第2号

湯本豪一 1996 『図説 明治事物起源事典』 柏書房

小林和美 2002 『大阪陸軍幼年学校について』「大阪城発掘調査報告Ⅰ」自然科学・考察編 (財)大阪府文化財センター

小林謙一・渡辺貴子 2002 『物質文化としての近現代考古学の課題 - 大橋遺跡出土の近現代ガラス容器の検討から - 』「東京考古」20 東京考古談話会

市村新太郎 2003 『池島・福万寺遺跡出土近現代ガラス容器』 「大阪文化財研究」第24号 (財)大阪府文化財センター

金沢市史編さん委員会 2003 『金沢市史』資料編15 金沢市

松山和彦 2003 『九谷A遺跡』「石川県埋蔵文化財情報」第10号(財)石川県埋蔵文化財センター

[図・写真出典]

図1：新規作成【実測：筆者、トレース：筆者】

写真1：新規作成 【筆者撮影 石川県立歴史博物館所蔵 掲載許可を得る。】

写真2：新規作成 【筆者撮影 岐阜県不破郡垂井町 タリイピアセンター・歴史民俗資料館所蔵 掲載許可を得る。】

表1：新規作成

石盤出土遺跡

遺跡名	所在地 (現在名と旧名)	出土遺構	出土 遺物	石材	点数	遺跡周辺学校施設	備考	参考文献
本町一丁目遺跡	金沢市本町一丁目	整地層	石盤	黒色粘板岩	1 (破片)	横安江町尋常小学校	なし	金沢市編 1995 「金沢市本町一丁目遺跡」 金沢市埋蔵文化財センター
安江町遺跡	金沢市安江町	SK04 (土坑)	石盤	不明 (未確認)	1 (破片)	横安江町尋常小学校	共伴遺物に近世末～近代初頭の瀬戸物、摺鉢等あり。	金沢市編 1997 「金沢市安江町遺跡」 金沢市埋蔵文化財センター
醒ヶ井遺跡	金沢市醒ヶ井町	包含層	石盤	黒色粘板岩	1 (破片)	横安江町尋常小学校	線刻あり。(使用痕)	金沢市編 2001 「金沢市醒ヶ井遺跡」 金沢市埋蔵文化財センター
九谷 A 遺跡 (3・7・8・10次)	江沼郡山中町九谷町 (旧西谷町)	表土 包含層 SD5 不明遺構	石盤	黒色粘板岩	8 (破片)	九谷尋常小学校簡易科	測縁部端面に斜位の線状痕あり。(成形痕)	石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2006 「九谷 A 遺跡Ⅱ」(仮) 本年度報告書刊行予定
清金アガトウ遺跡	石川県野々市町清金 (旧清金村・富奥村)	包含層	石盤	黒色粘板岩	1 (破片)	清金尋常小学校簡易科	なし	石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2006 「清金アガトウ遺跡 第2・3次」(仮) 本年度報告書刊行予定
広坂遺跡	金沢市広坂町	包含層	石盤	黒色粘板岩	1 (ほぼ完形)	石川県師範学校付属小学校	なし	*未報告

石筆出土遺跡

遺跡名	所在地 (現在名と旧名)	出土遺構	出土 遺物	石材	点数	遺跡周辺学校施設	備考	参考文献
昭和町遺跡	金沢市昭和町 (旧折違町)	SD01	石筆	白・赤茶・黄土・焦げ茶色蠟石	6	横安江町尋常小学校	点数は未報告資料も含む。	金沢市編 2004 「昭和町遺跡Ⅲ」 金沢市埋蔵文化財センター
安江町遺跡	金沢市安江町	未確認	石筆	白色蠟石	2	横安江町尋常小学校	なし	金沢市編 1997 「金沢市安江町遺跡」 金沢市埋蔵文化財センター *報告書掲載外資料
広坂遺跡	金沢市広坂町	土坑 包含層 など	石筆	白・赤茶・黄土・焦げ茶・紫色蠟石	200以上	石川県師範学校付属小学校	なし	*未報告

石川県埋蔵文化財情報

第14号

発行日 2005(平成17)年8月31日

発行 財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920 1336 石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076 229 4477 FAX 076 229 3731

URL <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>
E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 株式会社 橋本礎文堂

© (財)石川県埋蔵文化財センター